



SRI SATHYA SAI RAM NEWS

LOVE ALL SERVE ALL HELP EVER HURT NEVER

No.209 / 9月号 / 2022



9月号 CONTENTS

◎ サイの御教え

Sri Sathya Sai Baba 様御生誕100周年記念

◎ 心を制御する「膜妄想（まくもくぞう）」

◎ サッティヤム・シヴァム・スンドラム

◎ 帰依者インタビュー「私の旅」第6回

◎ ヴェーダを生きる 第5回

◎ サイと共に

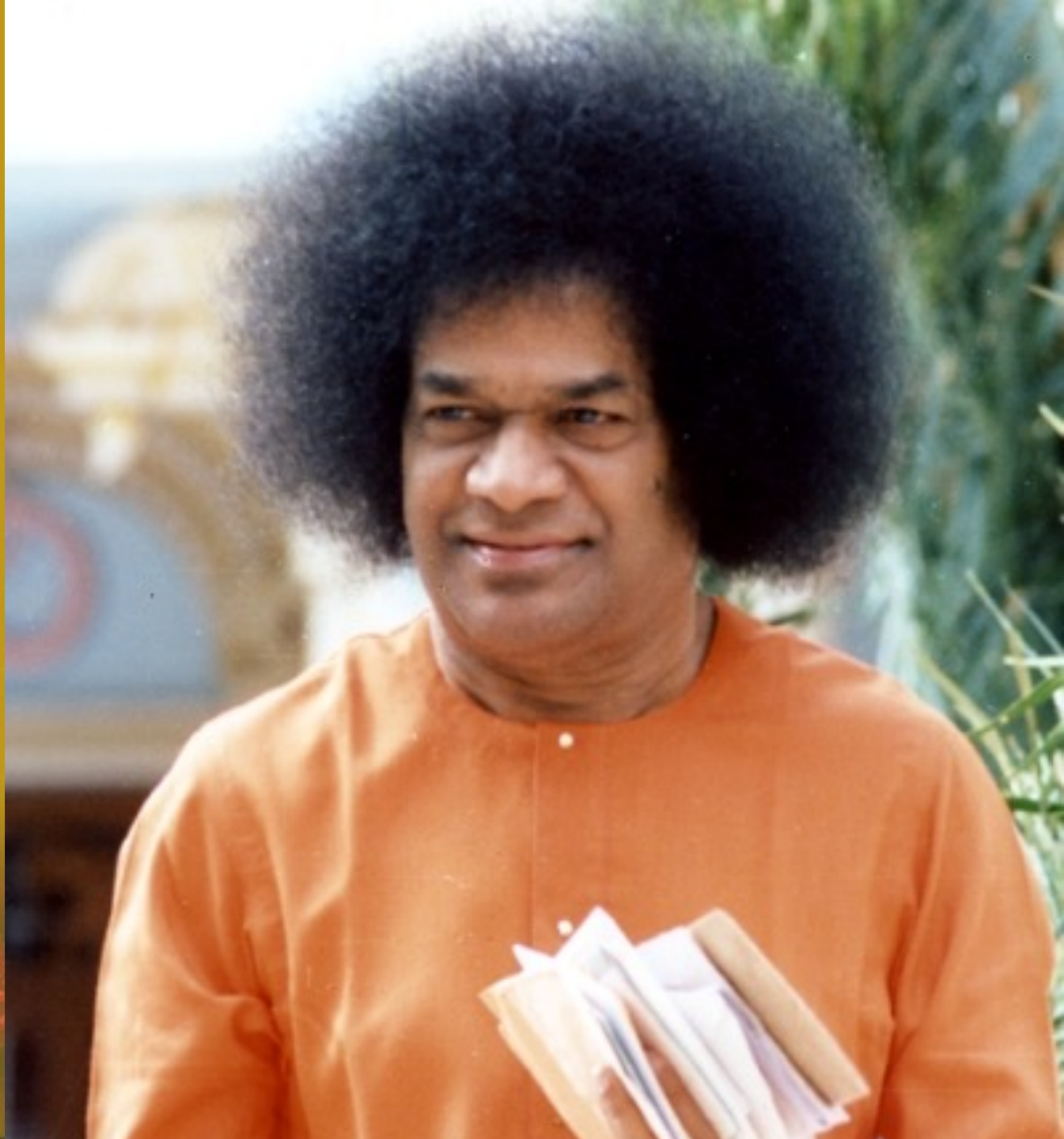
◎ ベジタリアンクッキング

◎ ワカ チンナ カタ

◎ 帰依者スピーチ

◎ 活動報告1 スタディーサークル

◎ 活動報告2 東京サイセンター





ॐ

ガネーシャ崇めよ 祈りのこころを
サティヤ サイへと 届け賜う

叡智と勇気の力の神よ
光の道を照らす神

すべての命の慈愛の神よ
真理と正義のガジャーナナ

愛の力で導きたまえ
サティヤ サイへと続く道



サイの御教え

奉仕に関するババの御講話

あなたの役割を
果たしなさい



神性は、顕現していない形で、すべての人の中に存在しています。海の波と同じように、すべての人間は神の火花です。すべての人間は、神であるサット・チット・アーナンダ（実在・意識・至福）の化身です。このことは、バガヴァッドギーターの中ではっきりと述べられています。

神が愛の化身であるように、人も愛の化身です。しかし、現代人は利己的で自己中心的であるために、愛を完全かつ適切に顕現させていません。

人類は、物質と科学の分野ではかなり進歩しましたが、道徳や霊性の分野では悲惨な状態に陥っています。あらゆる行いにおいて利己心が支配的になっています。すべての思考、すべての言葉の背後に利己心が突き出ています。この利己心が根絶されて、初めて神性は姿を現します。

セヴァ（無私の奉仕）を行う際には、すべての人の中には神が遍在していることを認識すべきです。人間はティヤーガ（犠牲）の精神とボーガ（感覚の求める快楽）への嫌悪を育んできませんでした。真の奉仕は犠牲の精神を必要とします。犠牲は不死を得るための唯一の手段であると明言されています。

人間は不満の餌食になっている

人々は神を探しているように見えます。人々は目に見えるものすべてに神が浸透していることに気づいていないのです。すべての姿は神の姿です。しかし、人の目が外に向けられているために、内を見る神聖な見方を持つことができずにいます。

人は平安を切望しています。平安や至福の源は自分の中にあるにもかかわらず、人は蜃気楼（しんきろう）を追い求めるように外にそれを求めています。ひっきりなしの活動、終わりのない心配、際限のない欲望のために、人は心の平安を失い、不満と不幸の餌食となっています。まず自分の中に平安を育むことです。それから、その平安を家族に広げます。それが家庭から村へと広がっていくようにするのです。このように、平安は個人から始まり、社会全体へと広がっていくべきです。

サイ オーガニゼーションでは真実〔真理〕、正義〔ダルマ〕、愛、平安、非暴力の価値を伝えるために努力していますが、それは単なる伝達であって、実践（あるいは実証）ではありません。ただ述べ伝えても、何の役にも立ちません。真実は実践されなければなりません。真実と正義〔ダルマ〕は、バーラタ〔インド〕文化が支持している最高の価値です。もし人々が真実と正義〔ダルマ〕に基づいて生きていないなら、人々の人間性には何の価値もありません。

すべての美德の中で、愛は何よりも優先されます。愛が育まれていれば、他のすべての徳目はそこから流れてきます。すべてのサーダナ〔靈性修行〕の形の中で、第一の位置を占めているのは愛です。愛は人間性の最高の印です。愛は神です。愛の中で生きなさい。一日を愛で始めなさい。一日を愛で満たしなさい。一日を愛で終えなさい。セヴァ（無私の奉仕）に従事して、アハンカーラ〔エゴ／自分が行為者であるという自我意識〕の痕跡をすべて排除しなさい。私たちの墮落は、神を忘れたことによるものです。神を覚えていれば、私たちの人生は平安と幸福で満たされるでしょう。

人間は3種類のイッチャ シャクティ（望む力）〔意志力〕を持っています。それは、
 1) スウェーッチャ（自由に望むこと）
 2) パレーッチャ（他の人の望みを実行すること）
 3) アニーッチャ（望まないこと）
 です。

3つの望む力の真の意味

スウェーッチャ（自由に望むこと）とは、他人の権利を顧みず、自分の力や持ちものを使って好きなように行動する自由という意味ではありません。真のスウェーッチャ（自分が望んでいるとおりに行動する自由）は、自分の心で決断し、それを行動に移

し、その結果が良くても悪くても素直に心からそれを受け入れることにあります。これが真の意志の自由です。自分が好きなことをしたいと望む自由には、それがかなったときに生じる結果を、等しく、自由に受け入れることが伴うべきです。

パレーッチャ（他の人の望みを実行すること）とは、他の人に促されたり頼まれたりして行った行為の結果を嘆き、自分が被った責任を他人になすりつけることです。

アニーッチャ（望まないこと）とは、自分の意志なく起こった、あるいは他人に促されて行った行為の結果として起こった偶然の出来事を、神の摂理として受け入れることです。

尊いものである人間の姿を手に入れた以上、人は人の姿に真に求められることに応じて生きようと努めなければなりません。人は無知や貧困や罪に苦しむために生まれてきたのではないということを理解すべきです。人はもっと高尚な運命のために生まれてきたのです。人は自分に授けられた役割を果たすべきなのです。

王とサンニャースィと踊り子

ある時、一人のサンニャースィ（出家行者）が

マハーラージャ〔王〕のもとを訪れて、ヴェーダーンタの聖なる真理を説きました。王は彼の説明に満足し、皿いっぱいの金貨を差し出しました。行者はそれを受け取るのを辞退して、「物質的な贈り物を受け取ることは、私が身にまとっている衣にそぐいません」と言いました。「世俗のものをすべて捨てた私に、このようなものが必要でしょうか？」と行者は言いました。王はこのサンニャースィの態度を気に入りました。

次の日、同じ人物が女の踊り子に扮して宮廷に現れました。踊り子は王の前で見事な踊りを披露しました。王は喜んで、踊り子に金貨の入った皿を差し出しました。しかし、踊り子は、「そんなはした金は受け取れません」と言い放ち、もっと多くを要求しました。その時、王は踊り子の衣装を着たその人物が前日のサンニャースィと同一人物であることに気がつきました。王は踊り子に言いました。「昨日、そなたは私の手による贈り物を拒否したが、今日は私が提示した以上を求めている。この態度の違いの真意は何か？」

踊り子は、こう指摘しました。「誰もが自分の役割に応じた行動をとらなければなりません。サンニャースィのローブを着ている行者にとっては、いかなる物質的な贈り物も拒否するのが適切なことです。しかし、踊り子の役割においては、自分にふさ

わしいと思う分を要求する権利があります。私は、今日は踊り子の役を演じていました」

その返事を聞いた王は、善い教訓を得たと感じました。「私は王だ。私は王としての行動をとるべきであり、王のローブをまとっている者にふさわしくない振る舞いをしてはならないのだ」。王は踊り子が教えてくれた教訓に感謝しました。

現代では、黄土色のローブを着ていても、心の中は汚いものでいっぱいの人たちがいます。彼らは家長でさえ持ってないような欲を持っています。そのような二重生活によって、バーラタ文化は損なわれています。パンディット〔学僧〕たちを見てみると、彼らの多くは経典に精通しており、経典をそらで唱えることができます。彼らはルッドラクシャマラー（ジャパに使う聖なる珠数）を誇っているかもしれませぬ。貴重なショールを身につけているかもしれませぬ。しかし、彼らの行動は彼らの衣や装飾品にふさわしいものではありません。

「パンディターハ サマダルシナハ」——真の学者はすべてのものを平等な目で見るとギーターは明言しています。平等な目を持っていない人を、どうしてパンディット〔学僧〕と言えるのでしょうか？ もし、サンニャースィと名乗る人が俗世のものをすべて放棄しながら欲望を抱き続けていたら、その人は

どうしてサンニャースィと見なされるのでしょうか？ 今日、経典の知識をひけらかしている多くの人は、ボーガラージュ〔贅沢の王者〕（贅沢を楽しんでいる人）やローガラージュ〔病気の王者〕（病気を自慢している人）であり、ティヤーガラージュ〔放棄の王者〕（放棄の大家）にはなっていません。

サイのセーヴァカの役割

皆さんは、サティヤ サイ セヴァ ダルの一員です。一員として、皆さんは自分の役割に沿った奉仕をするよう努めなければなりません。皆さんはセーヴァカ〔無私の奉仕者〕です。あなたが奉仕する相手が誰であれ、自分は神に奉仕しているのだという気持ちを持ちなさい。猿のハヌマーンがどのような精神でシュリ ラーマに仕えたかを思い出さなさい。ハヌマーンは猿なのだから知性やその他の資質に欠けていると思っははいけません。ハヌマーンは「穏やかで、徳が高く、強い」と描写されています。それほどの者が、ランカーのアショーカヴァナの木〔無憂樹〕の上で、ラクシャサ〔羅刹〕たちに「お前は何者だ、どこから来た？」と問われた時、「ダーソーハム カウサレーンドラッスヤ」（私はコーサラ国の主であるシュリ ラーマの召し使いである）と答えました。ハヌマーンは、自分の武勇や知識を自慢げに話しませんでした。ハヌマーンは、自分を謙虚で献身的なラーマの召し使いと称することに満足し

ていたのです。

「キンカラ（主の命令を実行する覚悟ができてい
る者）でなければシャンカラ（神）にはなれない」
という格言を心に留めておきなさい。

皆さんは、奉仕を通して自分の人生を変えなけれ
ばなりません。皆さんの奉仕活動には、ほんのわず
かでも、傲慢さや私利私欲が入り込む余地があっ
てはなりません。自分が誰かに行う奉仕は神への奉仕
である、という気持ちを心に植え付けなさい。そう
して初めて、人〔マーナヴァ〕への奉仕は神（マー
ダヴァ）への奉仕となるのです。

自分の行いのすべてを神に捧げる

社会で生まれ、社会で育ち、社会から教育を受け、
社会から数え切れないほどの恩恵を受けている皆
さんですが、皆さんは社会のために何をしています
か？ 社会奉仕とは、社会が私たちにしてくれたこ
への感謝の表現である、と考えるべきです。社会が
なければ、私たちは生きていけません。神から与え
られた体は、ダルマを実践するために使うべきです。
プラフラーダが言ったように、もし手、足、口、耳
といったさまざまな器官が主への礼拝に従事しない
なら、人間として生まれることが何の役に立つで
しょうか？ そのような人は、その人を産んだ母胎に

とって、重荷です。グニャーナ マールガ〔英知の
道〕の唱道者であるシャンカラチャーリヤ〔シャ
ンカラ〕は、最後に「バジャ ゴーヴィンダム」の中
でバクティの道を賞賛しています。

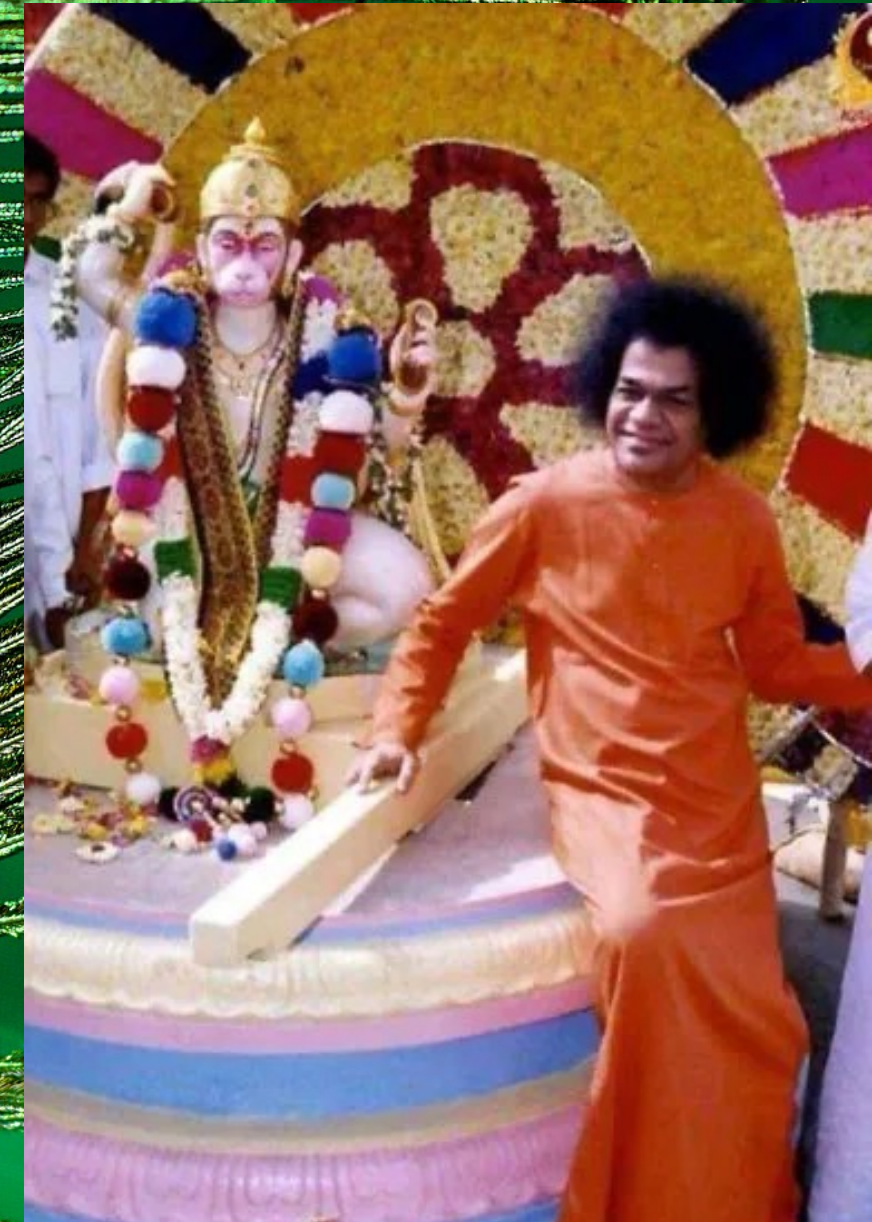
女性はおしゃべりが過ぎる傾向にあります。毎日
の家事も、集中して行う仕事と見なすべきです。も
し家事のためにサットサंगा〔善良な集まり／サッ
トサング〕に出られなくても、そのことで惨めな気
持ちになってはいけません。家庭での義務を果たす
ことは、サットサंगाに参加するのと同じくらい神
聖なことです。家庭での義務をきちんと果たしてこ
そ、外で適切な奉仕を提供することができるのです。
床を掃除するにしても、チャパティを作るにしても、
家でするどんな仕事も、それを霊性修行の一つの形
に変えなさい。すべての行いに神への愛を吹き込ん
で、それを神に捧げなさい。



1989年3月23日

アクティブワーカーと他の帰依者に向けた御講話
マドラス〔チェンナイ〕のアボッツベリーにて

Sathya Sai Speaks Vol.22 C6





サイの御教え

1969年ダシャラー祭の
ババの御講話 4

無駄な試み



善良な人との友情を育み、悩める人への思いやりを培い、幸福で繁栄している人を喜ぶ気持ちを養い、悪い心を持つ者への対する無関心を深める——これは古来よく行われてきた、穏やかで平和な人生を送るための処方箋です。神はそのような人を祝福し、恩寵を与えます。心からの喜びをもって唱えた神の御名は、人の心（マインド）に大きな影響を及ぼします。それは月光のように、人の内なる海の波に映ります。というのも、それは内からの神の響きであり、外からの神の呼び声だからです！しかし、ごらん下さい。科学によってもたらされるもの——物質世界を扱うもの、確認可能な部類の思考という方法によって測定や計量や計算ができる物事や出来事を扱うもの——は、喜びを求める人間を荒涼とした世界に追いやってきました！

先ほど、チャンドラモーウリ シャーストリは、マントラについて、「信心を持って意味を十分に理解した上で繰り返し唱えようと、神の神秘体験を与えることができる」と、あなた方に話していました。つまり、マントラは、あなた自身の心の電流で充電されたとき、文言の効力によって引き寄せられる神の近くにあなたを置くことを可能にするのです。

マントラとは何でしょう？「マン」（マナナ、すなわち、潜んでいる意味を考え続けること）、「トラ」（トラーナ、すなわち、救う行為、悲しみを越

えられるようにする行為)。心（マインド）がマントラに必要な力を充電することができるための条件は何でしょう？ 何よりもまず、「一点集中」です。

さて、心はとても粗末な道具です。というのも、心は鈍いからです。心はあまりにも多くの物や目的を追いかけます。神に注意を向けるようにとあなたが心に説得したその瞬間にも、心は映画館やバザール、クラブのカードルームなどへとふらふらと出かけていきます。神の大いなる荘厳さに思いを馳せることに心が同意することは、めったにありません。あなたが心を神に向けさせると、心はあたかも、大洪水に直面しろ、あるいは、地獄の恐怖を迎え撃て、とあなたが心をけしかけているかのように振る舞います！

神への思いに浸るには神性への信仰心が不可欠

神への思いに浸るためのどんな修行にも不可欠な、神性への信仰心がないのです。その信仰心は、信心深い人と付き合うこと、信心深い人の生涯や体験を読むこと、そして、自分自身が体験を重ねることによって、ゆっくりと芽生えることができるのみです。ナーマ サンキールタン（共に神の御名を歌うこと）は、たちどころに信仰心を生じさせます。最初は、好むと好まざるとにかかわらず、日課として御名を唱えなければなりません。やがてその味は、それが

癖になるほど、あなたを引き込むでしょう。神の御名を繰り返し唱えることは、尽きることのない喜びをもたらしてくれるのです。私たちは、ハートの蓮の花について語ります！ なぜでしょう？ 蓮は水中で育ち、水中で栄養を得て、太陽の下で花を咲かせます。ハートも同様に、バクティ（信愛）から栄養を得て、グニャーナ（英知）によって花を咲かせます。

神の御名のほとんどは、2つの文字あるいは音節で構成されています。2という数字では、（ラーマ、クリシュナ、ハラ、ハリ、ダッタ、シャクティ、カーリーといった二文字の御名の）1つ目の音節はアグニ（火の原理）を表しており、積み重ねた悪徳、すなわち罪を焼き尽くすということを意味しています。2つ目の音節はアムリタ〔不死〕の原理を表しており、これは回復させ、リフレッシュさせる、改善する力です。この2つのプロセスが必要なのです。すなわち、障害物の除去、そして、建造物の建設です。

主クリシュナはヤショーダーに育てられましたが、彼女はクリシュナがどこで生まれたのか知りませんでした！ クリシュナは実の息子のように愛され、扱われました。つまりそれは、ヤショーダーの愛は清らかで、利己的な思惑によって汚されていなかったということです。このたとえば、こう理解されます。

へその領域で生まれた神の生氣は、その後（ゴークラ村でナンダとヤショーダーが）御名を絶えず繰り返し唱えたことにより、舌の上で保持され、育まれたのだ、と。

ラーマの原理は愛の原理であり、それは神々の贈り物として、偉大な犠牲の果報として、天界から降りてきたものです。「ラーマ」は「歓喜」を意味します！ 生来備わっている真我（アートマ）ほど歓喜しているものはありません。それゆえラーマは「アートマ ラーマ」とも呼ばれているのです。

では、どうしてバラタは、ラーマを正統な後継者とする王位の座を奪うことに応じたのでしょうか？ ラーマが追放され、ダシャラタ王がラーマとの別離を悲しむあまりに死んだとき、バラタとシャトルグナはケーカヤ国の都にいました。〔帰国せよとの〕知らせが届き、アヨーディヤーの都に暗い影を落としていたその二重の悲劇を知らずに宮殿に入ったとき、バラタは何らかの災いを感じ取りました。王家の師であったヴァシシュタ仙は、バラタに王位に就くようにと勧めました。というのも、君主が不在であれば王国が苦難を被ることになるからです！

バラタが示した主ラーマへの愛の模範

バラタは、「私が祈る神であり、絶え間ない愛に

満ちた崇敬を受け取る主である者」のもとに行くことを許可してほしいと懇願しました。ヴァシシュタ仙は、君主としてバラタが王位に就くことはバラタの父の命令であり、師の助言でもあると、バラタに述べました。バラタは、その要求は両親、国民、師、そして、アヨーディヤーのすべての人がバラタに対して持っていた、きわめて激しい憎悪の証拠である。なぜなら、もし彼らがバラタを愛していたら、決してバラタにそのような恥ずべき罪を犯すよう迫らなかつたらうと、返答しました。

バラタは合掌してヴァシシュタ仙の前に立ち、懇願しました。

「王国を統治する重責を私に背負わせることは、正当で公正なことでしょうか？ それは私の父を殺し、母を寡婦にし、私が自分の息よりも大切にしている最愛の兄を、兄が心から愛している妃と共に悪魔の棲む森へ追放させ、最終的に、私の母にぬぐうことのできない恥辱を与えることとなります。私の王国は、ラーマが統治している王国、すなわち、私の心臓です。そこは、ラーマの栄光を収めるには小さすぎる国ですが」

バラタの名前それ自体が、バラタはラーマへの愛に浸りきっているということを示しています。

（「バ」は、バガヴァーン〔宇宙のすべて〕、すなわち主ラーマを意味し、「ラタ」は、～を喜ぶ、～を幸せに思う、～に執心している、を意味する）

教育が人間のハートを硬化させている

バラタがしたように、あなたの中で主への愛が育つようにしなさい。王座さえも捨てるほどの崇敬の念が、あなたの中に花開くようにさせなさい。そうすれば、あなたは、あなたの国、あなたの文化、あなたの社会、あなたの宗教、あなたの共同体にとって、大いに役立つことができます。それができないなら、あなたが体験してきたサットサンガ〔神聖な集い〕への参加、霊的な講話を聴くこと、霊性の大家たちと会うこと、霊的な書物を学習すること、といった骨折りは、すべて途方もなく無駄な試みになってしまうでしょう。

読み書き、技能、適合、物質的進歩に重点を置いた教育システムが、人のハートを硬化させ、軍用品の蓄えのもう一つの武器にしています！ 人の知性は、絶え間ない嘘の繰り返しによって鈍くなり、人の聖なる感情を養う畏敬の念や尊敬の念が、時代遅れのものとして非難されています！ 聖人、聖地、聖河は嘲笑されています。長い間、神々の遊び場、聖者の生育の場、人類のグル〔導師〕であったインドが、今ではヴェーダーンタの光を求めて声を上げる人々〔ヴェーダの価値を認識している外国人〕のドアの前に立つ物乞いになっています！

その光の輝きを知り、あなたの二つの翼——バク

ティ（信愛）とシラッダー（揺るぎのなさ／シュラッダー）——があなたを持ち上げることができる高さまで、その光に向かって飛んでいきなさい。

シャーストリは、スワミの奇跡を描写するのは不可能なことだと言いました。その神秘を理解していない人が、どうやって説明することができるでしょう？ 海岸にいる人が、どうやって海の波を数えられるでしょう？ 海岸にいる人が全部の数を数えることはできません。その人にとっては、自分が数え始めた波が最初の波で、数えるのをやめた波が最後の波です。聞いて、反芻（はんすう）して、アドバイスに従う——これがあなたにとって十分なサーダナです。

私の教えにおいて第一に重要なのは、あなたの両親、特に母親を敬いなさいというものです。あるとき、大変なハリケーンに見舞われた地域がありました。あまりの激しさにより、家という家がすべてなぎ倒され、住民は食べるものも寝る場所もなくなりました。最もひどい被害を受けた人たちの中に、ある母親と二人の息子がいました。長男は徳の高い素晴らしい息子で、家族を安全に守り養うことに責任を感じていました。というのも、彼は母親を愛していたので、何にも増して母の愛と祝福を得ようと努めていたからです。

真の帰依者は、まず母親を敬うべし

あなた方は、バーラタ マータ〔母なるインド〕、つまり母国について話しますが、どの母親も同じように呼吸をし、同じ血筋にあるのです。その母親は、下の子を連れて物乞いに出かけ、飢饉（ききん）に襲われたその地域で施されるわずかな食物で生き延びていました。しかし、間もなく母親は、自分がほんの数歩を歩くことさえできないほどに衰弱していることに気づきました。そのため、家族が食べていくには、長男が一人で物乞いに出なければならなくなりました。長男は母の足元にひれ伏して、「お母さんがしてきたことは僕がやります。みんなの食べ物を集めてきます」と言いました。長男は、母親が無理をして健康を悪化させるのは嫌でした。けれども、ほんのわずかな食べ物だけで、どうやって三人が生きていけるでしょう？ 長男も衰弱していました。

か弱い声と、おぼつかない足取りで、長男は大地主の家に行き、わずかな食糧を乞い求めました。その家の女性が、中に入るようにと言い、少年を葉っぱのお皿の前に連れていき、食べ物を盛りました。しかし、少年は食事をとるために身をかがめることなく、ふらついてバタリと床に倒れてしまいました。大地主が部屋に駆け込んできて、死に際にいる少年がふりしぼる最期の言葉を聞き逃すまいと、少年の口元に耳を寄せました。少年はこう言っていました。

「いえ、いえ、先にお母さんに食べ物をあげないと。僕の番はそれからです」

あなたが負っている借金は返すことができるかもしれませんが、あなたが母親に負っている恩は決して返すことができないほど大きなものなのです。自分は神の帰依者だと言う人は、このように、それにふさわしい行いをしなければなりません。神の帰依者は自分の母親を尊ばなければなりません！

サティヤ サイ ババ述
ダジャラー祭（ナヴァラートリ祭）
プラシャーンティ ニラヤムにて
1969年10月16日
Sathya Sai Speaks Vol.9 C24



シュリ サティヤ サイ ババ様 御生誕100周年記念ヴィジョン



ハートの中におられる神様を絶え間なく憶念し
人類同胞愛という一体性の花を捧げます



心を制御する 「莫妄想（まくもうぞう）」

SSSIOJ会長 住友正幹

お釈迦様は、この世に生きることは苦であると諦観されました。なぜなら、人は人として生まれた以上、誰でも生老病死という苦を体験しなければなりませんし、愛別離苦（あいべつりく）「愛する人と別れる苦しみ」、怨憎会苦（おんぞうえく）「嫌な人と出会う苦しみ」、求不得苦（ぐふとくく）「求めるものが手に入らない苦しみ」、五蘊盛苦（ごうんじょうく）「心の働きによる苦しみ」という苦にも直面させられるからです。

もうこんなに悩みや苦しみの多い人生は早く卒業したい……。人は誰でもそんな想いをいだく時があるのではないのでしょうか？もっと平安に生きたい、もっと幸せに生きたい、誰でもそう思うはずです。少なくとも悩みのない毎日、苦しみのない毎を送りたい、そうではないのでしょうか？

生老病死という根源的な苦は、肉体を持って生まれた者の宿命であり、どんなに抗っても抗いきれるものではありません。この世のものはすべて諸行無

常であり、生じたものは消滅するのがこの世の定め。肉体という道具もまたしかりだと受け入れるしかありません。この根源的な苦を克服するには、肉体と自己を同一視している迷妄を克服しなければなりません。

残る4つの苦しみの内、日常で多くの人を悩ませているのは、実は五蘊盛苦、つまり心の働きによる苦しみではないでしょうか？五蘊とは、色受想行識という心が物事を認識する5つのプロセスを示していますが、心は認識の段階で、自分の想いを反映させてしまいます。その結果として、悩みや苦しみを作り出していると言えます。

しかし、悟りを開きブッダとなられたお釈迦様は般若心経において、照見五蘊皆空つまり、五蘊は実体のないもの（空）であると説かれていますので、心の働きが生み出すものはすべて幻想であることを知っておく必要があります。

パタンジャリの著したヨーガスートラに次のような言葉がありました。「ヨーガの目標は心の作用を止滅することである。鋭敏な学生には、この一つのスートラで十分だ。なぜなら後はすべてこの一つのスートラの説明にすぎないからだ。心の“作用（はたらき、諸状態）”の止滅が成し遂げられたならば、その人はヨーガの最終目標に到達したことになる。」

パタンジャリは、ヨーガの目標は「心を滅すること」ではなく「心の作用を止滅すること」としていることにご注意いただければと思います。

（ここで使われている「心」という言葉は、日本語のハートという意味ではなくマインド（思考）を意味しています。）

心は道具にすぎませんので、使い方により、良いものにもなれば悪いものにもなりますが、心という道具自体を否定する必要はありません。

スワミは、心は鍵であり、外側（世俗）に回すと輪廻の原因になり、内側（神）に回すと解脱の原因になると説かれていますので、心はとても大切な道具なのだとと言えます。

しかし、私たちの心は外側の刺激に反応し、決してじっとしていません。モンキーマインド（お猿のようにじっとしていない心）と言われるゆえんです。一説によれば、私たちの心には実にとりとめのない想いが数秒に一度ぐらい生じており、その数は1日にすれば何万にもなるとのことです。

想念は食べ物や環境からの影響、人類共通の潜在意識からの影響などもありますので、どんな想念が浮かんだとしても、それは自分のものと考えるのは正しくありません。ただ自分に生じたというだけのことです。体と自己の同一視が迷妄であるように、



心や感情と自己の同一視もまた迷妄であることを忘れないようにしましょう。私たちは、体や心、感情ではなくそれを見る者（真我）です。

スワミによれば、心は衝動から芽生えてくる欲望の寄せ集めであり、欲望で形成されているとのことですが、私たちが出合う悩みや苦しみは、これらの欲望に突き動かされて生じるもののようです。それらは、仏教的には渴愛とよばれており、いくら満たしても満たしきれず、むしろさらなる渴きが生じるという性質があります。それらは、物欲や、五感を満たしたいという感楽欲、生きたいという生存欲、自分の存在を認められたいという承認欲などです。

悩みや苦しみの背後には必ず何かの欲望が潜んでいます。そして不思議なことに、自分の中にどのような欲望があるかを知るだけで、悩みや苦しみが軽減されることとなります。あるいは理由が分からずなぜか不満だというような場合や、なぜか分からないけど怒りがあるというような場合でも、何かの欲望（欲求、期待など）が思い当たれば、モヤモヤが解消されることがあります。

例えば、多くの人が人間関係から生じる次のような悩みに悩まされています。「なぜ、あの人は自分のことを分かってくれないのか？」「なぜ、あの上司（部下）はあんなに高圧的なのか？」「なぜ、い

つも言い争いになるのか？」「なぜ、友人や知り合いの成功を嫉妬するのか？」「なぜ、成績が悪いと悩むのか？」「なぜ他人の目が気になるのか？」「なぜ勝ち負けにこだわるのか？」などなど……。

これらのすべてに共通するのはたった一つの欲望です。それは自分を認められたいという承認欲なのだといえます。

「そうか、自分には他人に認めてもらいたいという承認欲があるのか」そう思い当れば、悩みが自分から離れていくことに気づきます。

もし承認欲がなければ、例え理不尽な言動を受けたとしても、怒りという反応にはならないでしょう。ですので、悩みや苦しみを克服する根本的な解決法は、そのような欲望をなくすことです。

しかし、そうだと分かっているのに、人にはできない時があります。いや私たち凡人にはできない時の方が多いでしょう。ここに葛藤が生じますが、悩みの背後にある欲望を理解することと、もう一つ覚えておくという方法があります。

禅の修行法です。それは悩みや苦しみ、連想や記憶、分別や裁きなどの妄想が浮かんだ瞬間に「莫妄想（まくもうぞう）」と断ずるのです。莫妄想とは「妄想することなかれ」という意味ですが、自分の想いを「妄想」と認識することで、その囚われから

離れ、妄想を断ち切ることができます。

スワミの108の御名の中に「オーム 貪・瞋・痴を戒め滅ぼす神に帰命し奉る」という言葉があります。貪瞋痴（とんじんち）の、「貪」はむさぼりを、「瞋」は怒りを、「痴」はおろかさを意味しています。

「妄想」は貪・瞋・痴（とんじんち）の痴であり、心の三毒の一つなのです。妄想が生じたら「莫妄想！」あるいは「妄想」と断ずるべし、です。

同様に、貪欲が浮かべば「貪欲」、怒りが浮かべば「怒り」と言葉で断ずれば、心からそれらを放し、不毛な心との内的対話を終わらせることができるのではないのでしょうか？

スワミの御言葉

「人が最初にとり入れなければならないサーダナ〔靈性修行〕は、内なる静寂を養うことです。それは、心との終わりのない対話を終わらせるためのものです。心をしばらく休ませなさい。不適切なことを事細かに心に思い浮かべて、妬みと貪欲という煙で心を汚染してはいけません。良いことも悪いことも、私たちが抱く考えはすべて、カーボン紙のように心に転写されます。そのようにして、弱さや不安定という要素が心に入れられてしまうのです。心を、落ち着いた、澄んだ状態に保ちなさい。ノンストッ



プの会話によって、毎瞬毎瞬、心を動揺させてはなりません」

1982年5月20日 純粋性に関する御講話より

スワミの御言葉

「心（マインド）は、サンスクリット語では「マナス」という名前です。なぜなら、心はいつも、「マナナ」すなわち「思考する」作業に携わっているからです。衝動は心で生まれます。しかしながら、心は自らの中で生じる矛盾した衝動によって、頻繁に道を誤ります。心の落ち着きのない性質は、人の霊性の進歩の障害として作用します。そのため、もし魂の歓喜に浸りたければ、心を制御することはどの求道者にとっても避けられません」

1979年 第7回夏期講習における御講話より

スワミの御言葉

「心それ自体には独自の実体はありません。心は衝動から芽生えてくる欲望の寄せ集めです。布は要するに糸の束です。糸は、元々は綿です。同様に、欲望は元々の衝動から生じ、心はそれらの欲望で形成されています。布は糸を1本ずつ引き抜いていけばなくなってしまいうように、心も欲望の根を抜き取っていくことで消滅させることができます」

1979年 第7回夏期講習における御講話より

スワミの御言葉

「心の制御の第一歩は、この世は束の間のものであり、それゆえ、この世で得る喜びは一時のものであるという事実を心に刻むことにあります。五感の喜びは満足を与えてはくれません。五感の欲望は、満たされれば満たされるほど数と激しさを増していきます。薪を投げ込めば投げ込むほど火が勢いを増していくのと同じです」

1979年 第7回夏期講習における御講話より



サッティヤム シヴァム スンダラム 5

第42回

1956年から1975年にかけて初代病院長として働いていた幸運な外科医、B・シーターラーマイアフ医師は、こう書いています。

「まさに始まりの時から、ババは私に、ババの指示の下で奉仕するという二つとない機会を与えてくださいました。私はしばしばバガヴァンに、寄る年波には勝てませんので私はこの務めから解かれたほうがよいかもしれませんと、お願いしていました。ですが、その度に、きっぱりと要求を払いのけられ、仕事を続けるようにと力強く励まされました。

『恐れてはいけません。ただ道具でいなさい。私があなたのためにすべてを行います!』

時折、病院で働く医師が何か月も私一人ということもありました。そんな大変な時期、私はババの恩寵によって毎日200人から300人の外来患者を診察し、薬を処方し、その上さらに、相当数の手に負えない

内科の患者たちを診ることができていました。バガヴァンは、恩寵を目に見える形でも、見えない形でも与えてくださる方でしたので、そこには失敗という事例は一つとしてありませんでした」

一方、病院の二周年記念式典においてシーターラーマイアフ医師が大きな声で読み上げたすばらしい奉仕活動の成功記録の報告に関して、ババはこう明言していらっしゃいます。

「無私の奉仕の精神が帰依者たちを動かして病院の建設中にシラマダーン〔無償で労働力を提供すること〕を行い、それがここにいる医師たちを動かしたことが、この病院が成功している主な理由です」

病院での体験について、シーターラーマイアフ医師はこのように語っています。

「この病院で患者たちが体験する説明のつかない一連の回復に、私たちは医師として驚かされました。特に、国内あるいは海外で、すべての主要な病院施設から治療不可能な患者として拒否されたあげく、ここへたどり着いた患者たちの場合がそうです。バガヴァンは、苦しんでいる人、人生という競争においてハンディを持っている人に、より多くの愛を降り注がれます。バガヴァンは、健康という贈り物を、有益な目的のために活用するように、と授けてくださるのです」

帰依者たちは、数えきれないほどの奇跡的な治癒や健康が回復したいくつもの事例を、よく知っています。それらはバガヴァンへの帰依心が引き起こしたものです。起こる場所はバガヴァンのすぐそばのこともあれば、世界中のどこか遠い所のこともあります。バガヴァンは、助言を求める医師たちの聖なる相談相手として何度も振る舞ってこられました。医師たちが真つ暗闇で手探りしているときには、特にそうでした。たびたび、バガヴァン自身が、病気を適確に診察したり、適確な薬を処方したりする医者となり、時には緊急の外科手術を行って、帰依者の生命を救ってこられました！ また、ババが死んだ人を生き返らせたという事例もいくつか記録に残っています。

ある時、ババは、なぜ病院建設という仕事を手掛けられたのかという理由を明らかにされました。

「私は、病院で治療を受けて初めて心の平安や満足を得るような人々のために、病院を建てました。彼らは、常に健康な存在であるアートマへの信心が最高の気付け薬であり、最高の薬であるということを知りません。彼らはこのような病院を訪れて、神の恩寵はあらゆる薬よりも効能があるということを理解することでしょう。彼らは神の方へと向きを変え、真我の悟りの道を歩くようになるでしょう」

奇跡的な治癒の神秘について尋ねられた時、ババ

はこのようにお答えになっています。

「それは、生類も生類以外のものも、すべては私と一つであるという、私の体験です。私の愛はすべての人に注がれています。というのも、私はすべての人を自分として見ているからです。もし心の底から私の愛に報いるならば、私の愛とその人の愛が一つになって、その人の苦痛は癒されます。相互依存の関係がない所には、治癒は起こりません」

もちろん、神の意志のみが及ぼす治癒もあります。ヒスロップ博士がババに尋ねたことがあります。

「スワミが人を癒やされるのは、カルマ〔その人の行為の結果〕がそれにならなっていると思われるときのみですか？」

ババは答えました。

「いいえ。もしスワミがその人に満足していたら、スワミはすぐさまその人を治します。そこにカルマが入り込む余地はありません。もしその人が清らかなハートを持ち、スワミの教えを生きているなら、スワミの恩寵は自動的にその人のもとへやって来ます」

ここで、シーターラーマイアフ医師がプラシャーンティ・ニラヤムで目撃した奇跡の治療をいくつかご紹介しましょう。

マイソール藩王国のマレナードゥ出身のコーヒー

農園主がいました。彼は30年以上もリウマチ性関節炎のさまざまな症状に苦しんでいました。高熱で病院へ運ばれてきた時には、腎臓もやられていました。バガヴァンはシーターラーマイアフ医師に、彼を診察して何本か注射をするようにと指示を出しました。けれど、その極度に憔悴しきった寝たきりの患者は、医療の専門家に何かをさせることを一切拒否しました。彼はこれまで、アロパシー〔西洋医学／対処療法〕、アーユルヴェーダ、ホメオパシー〔代替療法〕、その他もろもろを受けてきて、もう、うんざりしていたのです。彼は、バガヴァンだけに治療をして欲しかったのです！バガヴァンは丁寧に応じました。バガヴァンはその患者のために小さな液体の入った瓶を物質化し、その液体を2滴、水に混ぜて一日二回飲むようにと言いました。10日もすると、彼はマンディルのベランダまで一人で歩いていけるようになり、一ヶ月もしないうちに、マンディルへ行ってバジャンを歌うようになりました。それから15日もしないうちに、彼はすっかり元気になりました！

デリー近くのムラーダーバードに、舌の癌で苦しんでいる人がいました。彼は2年間デリーの病院に入院して優れた医師たちの治療を受けていましたが、効果はありませんでした。あらゆる医療の専門家に見放された彼は、最後の手段としてプラシャーンティ・ニラヤムへとやって来ました。ある朝、バガ

ヴァンのダルシヤンを受けた後、彼は何気なく病院に足を踏み入れ、シーターラーマイアフ医師に自らの苦悩をとうとうと訴えました。医師は、希望を捨てないようにといい、ホウ素グリセリンを舌に塗り、ビタミンB群の錠剤を飲むようにと何錠か渡しました。もちろん、医師はその患者に、ババに助けを求めて祈るようにとも助言しました。その二日後、その患者は、バガヴァンに祝福されたヴィブーティの包みをいくつか持ってプラシャーンティ・ニラヤムを出ていきました！いまや、それが彼の唯一の薬でした。彼は、家で礼拝するために、ババの写真も一枚持って帰りました。一年後、彼はプラシャーンティ・ニラヤムへ戻ってきましたが、癌は完全に治っていました！彼はシーターラーマイアフ医師に、いかにしてババが彼の家で、そばにいる証しを示してくださったかを明かしました。バガヴァンの写真を含め、額に入ったさまざまな神様の絵姿から、ヴィブーティがあふれ出したのです。

タンガヴェルは、ボンベイの繊維工場で働いていました。彼は40歳の時、直腸癌に苦しめられました。雇い主がしばしば彼をスイスへ連れていき、医師たちに彼の疾患を診てもらっていました。タンガヴェルは、ババのことを耳にして、急いで恩寵を求めてプラシャーンティ・ニラヤムへと出かけていきました。病院で、シーターラーマイアフ医師が彼に出してあげられたのは、いくらかの緩和剤だけでした。とこ



ろが、夜になってタンガヴェルがプラシャーンティニラヤムのシェッド〔簡易宿泊所〕で眠っていると、鋭い器具を手に持ったババが夢に出てきて、彼に手術をなさったのです！目が覚めると、彼の体と衣服に血の痕が付いていました。けれど、彼はすこぶる安堵していました。後に、タンガヴェルは、シーターラーマイアフ医師に、「夢の中での外科手術」によって自分は奇跡的に治ったという手紙を書きました！

シーターラーマイアフ医師は、こう締めくくります。

「胆石は、『そんなものは想像の中にしか存在しません』とババが軽くおっしゃると、消えてなくなります。心臓の発作は、不思議にもおさまり、喘息の苦しきは、もはやなくなり、腫瘍は、ババの命令を受けて消滅します。実際、一切は、ババが住まわれる肉体でのババの御心の戯れなのです。バガヴァンは、私のような医師たちを教育するために、そして、神の恩寵という治癒の力を伴わない単なる医療行為は役に立たないということを私たちに確信させるために、この病院を設立なさったのだと、私は固く信じています。その治癒の力は、心からの祈りによって容易に手に入れることができるのです」



帰依者インタビュー - 私の旅 - 第6回

サティヤ サイ出版協会 代表理事
比良 竜虎

サイのミッション

前回は、私が初めてババ様にお会いした時の話をしました。そこから私の人生が変わり始めたわけです。ババ様は神だと信じるようになってから、ババ様についての本を読むようになりました。最初に読んだ本はカストゥーリ博士の『Loving God』（邦題：愛の神）で、この方は神だと確信するようになりました。そして忙しい仕事をやりくりして、年に2～3回はインドに行くようになりました。私はサイのミッションに夢中になり、50歳までの約20年間、サイの活動に邁進しました。

初めに、サティヤ サイ オーバーシーズ オーガニゼーション (Sathya Sai Overseas Organization : S S I Oの前身) 会長であるインドラル シャー先生にお会いしました。シャー先生からは、日本も S S O Oに正式に加盟して、ババ様の御教えを国内に広めるようにとのアドバイスをいただきました。

そこで、既にバジャン会が開かれていた神戸に（「私の旅」第4回参照）、1979年、サティヤサイ神戸センターを設立し、神戸センターを本部として、日本も S S O Oに加盟しました。そこからババ様の御教えを日本で広める活動が本格的に始まったのです。翌1980年には東五反田でサティヤサイ東京センターを立ち上げました。続いて、1982年にサティヤサイ横浜センターが発足しました。同年サティヤサイ オーガニゼーション ジャパン (S S O J) の初代会長にBro. クブチャンドニが就任しました。

サイの御教えは徐々に日本全国に広がっていき、毎年のように日本各地でサイ センターやサイ グループが設立されました。1985年には、S S O Jの2代目会長に、日本人初の会長となるSis. 津山千鶴子が就任されました。

年を追うごとに S S O Jの活動内容は充実していききました。1990年にはジュムサイ博士とBro. ジャガディーサンをゲストに迎え、神戸で第1回

S S O J 全国大会を開催しました。



第1回 S S O J 全国大会（開催地：神戸）



右からジュムサイ博士、インド総領事（当時）
Bro.比良（1人おいて）Sis.津山千鶴子
Bro.ジャガディーサン



右からBro.チュガニ、Bro.比良
インド総領事（当時）、ジウムサイ博士
Bro.津山直一、Sis.津山千鶴子



山本正子先生（右、赤い服の方）
柴田節子先生（中ほど、白い服の方）

翌1991年には横浜で第2回全国大会「テーマ：霊性と飲酒 Spirit & Spirituality」を開催しました。第2回大会では、サティヤサイ大学ブリンダー

ヴァン校アニル クマール校長（当時）が、ババ様からの祝辞を携えて来日してくださいました。またSSOO会長のインドラル シャー先生もお越しになりました。



第2回SSOJ全国大会（開催地：横浜）

幸いなことに、インドを訪れるたびにババ様に直接お会いする機会に恵まれました。当時のインドは貧しい人や病人がとても多かったので、多くの奉仕活動が行われており、さまざまな施設の計画・建設が進んでいました。インタビューで、というよりも、奉仕活動の中でババ様にお会いすることが多かったと記憶しています。

初めての頂きもの

ある時、ババ様が私に大きなダイヤモンドのつい

た指輪を物質化してくださったことがあります。そのダイヤモンドは親指の半分ほどもあり、きらきらと輝いていました。それをはめようとした時、私の心に「なぜ神様はこんな指輪を私にくださるのだろうか？」という思いが湧き上がって来ました。それはまるで日本のヤクザがはめているような、とても派手な指輪だったのです。

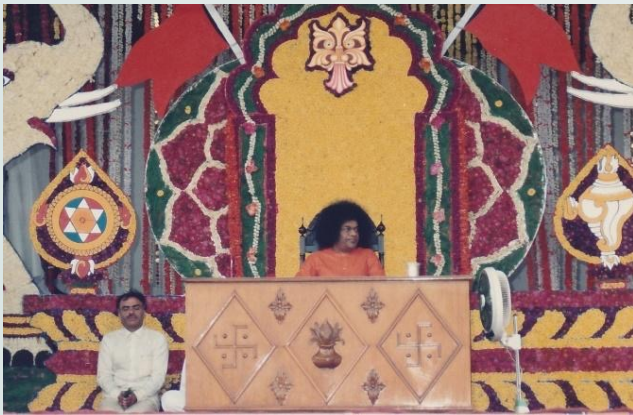
そう思った瞬間、ババ様は私に対して「あなたはこの指輪が嫌いですね」とおっしゃったのです。私が「はい、スワミ」と答えると、ババ様は「それでは変えましょう」とおっしゃって、その指輪に3回息を吹きかけられたのです。するとそれは、素晴らしく美しい珊瑚のガネーシャが付いた、落ち着いた感じのゴールドの指輪に変わりました。それが私がババ様から初めて頂いたものです。

御降誕祭での大役

1991年、「65周年御降誕祭で、ゲストスピーカーとして話をしてください」というババ様からのメッセージが私に届けられました。私は「とんでもない。話などできません」とお断りしました。すると私はババ様に呼び出されて、「なぜスピーチをしないのですか」と問いただされました。

当時は通常でも1日に3～4万人の人々がプッタパーティを訪れていました。御降誕祭ともなれば、

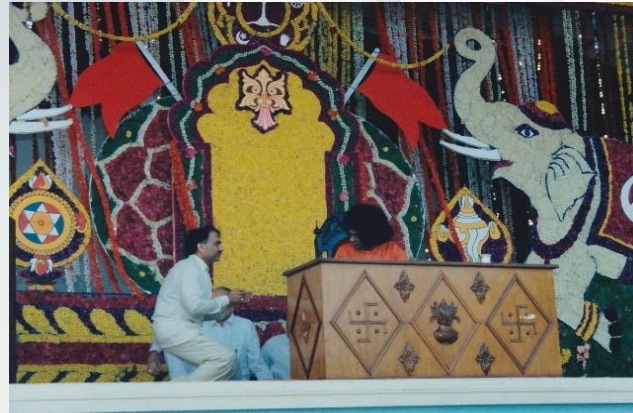
会場は巨大なスタジアムで、世界中から30万人もの帰依者が集まります。「スワミ、私は怖いのです。そんなにたくさんの人前で話をするなんて、私には無理です。インドの高名な哲学者もたくさんいらっしゃるというのに、私はそんな器ではありません。いったい何を話せばよいのか、見当もつきません。私にはできません」と答えました。するとババ様は「その30万人を1人だと思いなさい。人の数を見るのではありません」とアドバイスしてくださいました。私は勇気を振り絞ってスピーチをすることにしました。



65周年御降誕祭でのババ様とBro. 比良

その日のゲストスピーカーは、SSOOアメリカ会長ロバート ボザニ夫妻、インドラル シャー先生、そして私でした。驚いたことに、ババ様の玉座があるそのステージから会場を見ると、人々の顔はまっ

たく見えず、頭だけが一つの黒い海のように見えました。聴衆の顔がわからないので、見られているということを意識することもなく、落ち着いて話をすることができました。おかげ様でスピーチのあと、多くの方々から「良い話でした。感動しました」など、お褒めの言葉を頂き、安堵しました。



65周年御降誕祭でのババ様とBro. 比良

津山先生ご夫妻

SSOJが設立された当時、日本は物質的には豊かになったにも関わらず、ボランティアの精神はあまり見られませんでした。ほとんどの人が中流階級と言われていましたが、実際には貧富の差があり、孤児や、病気になっても満足な治療を受けられない子どもも数多くいました。

その頃のことで最も記憶に残るのは、SSOJ 2代目会長となった津山千鶴子先生と、その夫である津山直一先生にまつわる話です。東京大学医学部教授であった津山直一先生は、整形外科の医師として、国立身体障害者リハビリテーションセンター総長、日本リハビリテーション医学会理事長、日本肢体不自由児協会会長などを歴任された方です。

話は1980年代前半にさかのぼります。ある年、整形外科の学会がシンガポールで開催され、津山先生が日本代表として、千鶴子夫人を伴って参加されました。その学会の主催者であるシンガポールの整形外科医ピレー博士は、サティヤ サイ ババ様の帰依者でした。ピレー博士は、彼のクリニックのすぐ隣にあったババ様のバジャンセンターに、津山ご夫妻をゲストとして招待されたのだそうです。

ピレー博士は次のような話をされました。「サイババ様は神様です。私が整形外科医として治せないものは、すべてサイババ様が治してくださいます。私のクリニックには世界中からさまざまな患者が来ます」それを聞いた千鶴子夫人は、ぜひ一度インドに行ってみたい、とおっしゃったそうです。その後、ピレー博士の案内で、ご夫婦そろってインドのババ様のアシュラムを訪問されました。

二人はババ様のインタビューに呼ばれ、長さ約5cmもあるサラスワティー女神の指輪が物質化され、千鶴子夫人に渡されたそうです。その指輪を右の薬

指にはめた千鶴子夫人は「スワミ、日本にはさまざまな課題があります。スワミの御教えを日本人に伝えてくださいますか？」と直接お願いされたそうです。そこから、Sis.津山による「サナザナサラチ」誌の日本語訳が始まりました。「サナザナサラチ」とは、インドで定期刊行されていたババ様の御講話集です。

ご夫妻がインドから帰国された後、私は食事会に招かれ、お二人の体験談を伺いました。その時、私は、神様に会える人たちは徳高い人たちであるということに改めて感じたのです。

戦前、東京都板橋区に日本初の公的肢体不自由児学校である「整肢寮護園」がありました。これは、障害児には生活すべての面にわたる総合的な支援が必要であるという観点から、医療・教育・職能の賦与（ふよ）を三つの柱として創設された施設です。ところが、東京大空襲により、その病院や施設のほとんどは破壊されてしまいました。

その当時、まだ若かった津山直一先生は、最初はテントの中で障害児の治療を行っていたそうです。終戦後もいつ施設が再建されるのか見当もつかず、津山先生たちはご自宅を売却するなどして、障害児の治療を継続されたそうです。先生方のご尽力の結果、「整肢寮護園」は国により再建されました。その後「心身障害児総合医療療育センター」と名称を変えて、今も多くの障害児を養育しています。



整肢寮護園50周年記念祝賀会
日本肢体不自由児協会会長津山直一先生 (平成4年10月)

津山直一先生

始まった奉仕活動

津山先生からその話を伺った私は、横浜と東京のサイ センターで「心身障害児総合医療療育センター」での奉仕活動を始めました。当時は、900人ぐらいの手足の不自由な子どもたちが、5つの病棟に分かれて療養介護を受けていました。第5病棟には、背骨がなく寝たきりで動けない子どももいました。横浜サイ センターのインド人が作ったインド料理を子どもたちに食べさせたり、料理が食べられない子どもにはバジャンを歌ってあげたりしていました。

その当時の所長は、坂口亮先生という大変慈悲深い方でした。「サイ ババの歌を聴くと、最も厳しい

障害がある第5病棟の子どもたちも喜んでいました。だから必ず来てくださいね」とおっしゃっていました。その奉仕活動は十数年間続きました。



平成2年 小泉厚生大臣の視察

坂口亮センター所長（右側）

一方、Sis.津山は「サナザナサラチ」の日本語訳だけでなく、多くのババ様の本も日本語に翻訳してくださいました。その後、私たちはサティヤ サイ出版協会や、サティヤ サイ教育協会を立ち上げて、サイの活動は少しずつ地方にも広まっていきました。

（これまでに設立されたセンター・グループは次の通りです。すでに解散したもの、名称を変更したものも含まれます。新大阪、天王寺、天満、広島、北九州、札幌、岩国、千葉、浜松、三宮、新潟、那覇、盛岡、倉敷、静岡、福岡、長野、金沢、香川、武蔵野、帯広、京都、名古屋、鹿児島、東北、札幌、金沢、群馬、埼玉、奈良、多摩、川崎）

（つづく）

ヴェーダを生きる

第5回



宗教って必要あるの？ ～マントラプシパムと宗教と愛～

現代の日本において「宗教っぽい」という言葉は、あやしい、怖いというネガティブな意味で使用されています。

宗教ほど歴史が長く、人々の人生の拠り所となり、文化の基盤となったものはないにも関わらず、なぜこのような意味で宗教という言葉が使われているのでしょうか。現代において、宗教の必要性は一般的に受け入れられなくなってしまったのでしょうか。

この問に対して「マントラ プシパム」というマントラが答えを与えてくれます。

マントラ プシパムは、水と、他の元素や天体との間にある、原因と結果の関係について述べています。それらは、火、風、太陽、月、星、雲、季節（時間）です。

yo'pāmāyatānam̐ vedā | āyatānavān bhavati |
agnirvā apāmāyatānam | āyatānavān bhavati |
yo'gnerāyatānam̐ vedā ||
āyatānavān bhavati |
āpo vā agnerāyatānam | āyatānavān bhavati |
ya evam̐ vedā |

水の源を知る者は、水の最高の住処に到達する。水と火の起源を知る者は、それらの住処に到達する。火の源を知る者は、最高の住処に到達する。水と火との神聖な関係を知る者は、究極の住処（すなわちアートマ）に到達するであろう。

「ヴェーダテキスト第一巻」（サティヤ サイ出版協会）より

2006年、プッタパルティであるプログラムがスワミに捧げられました。その中で、マントラ プシパムの隠された意味が明らかにされました。それは、アメリカのある帰依者が、夢の中でスワミから教えていただいた内容をもとにした発表だったのです。驚くべきことに、マントラ プシパムの中に出てくる様々な元素は、以下のように世界の主な宗教を象徴しているというものでした。

火：ゾロアスター教

太陽：キリスト教

十字架は焼けつくような太陽の苦痛と苦悩の象徴です。エゴと肉体意識を十字架上で滅ぼすことはキリスト教の真髄です。

月：イスラム教

星：ユダヤ教

季節（時間）：仏教

仏教の法輪は原因と結果をもたらす時間に関係しているダルマを象徴しています。

このように、章ごとに出てくる様々な元素や天体が、それらに関連する宗教を見事に象徴しているのです。では、すべての章で共通して唱えられる「水」は何を象徴しているのでしょうか。それは「愛」です。世界には様々な宗教がありますが、すべての宗教の根底に等しく流れているのは「愛」です。前述のマントラの訳文の中の水を愛に代えてみると以下ようになります。

愛の源を知る者は、愛の最高の住処に到達する。愛と火の起源を知る者は、それらの住処に到達する。火の源を知る者は、最高の住処に到達する。愛と火との神聖な関係を知る者は、究極の住処(すなわちアートマ)に到達するであろう。

火が象徴するのはゾロアスター教ですが、この後、様々な元素がそれぞれの宗教を象徴し、愛と宗教の関係と人生の目的地が明らかにされているのです。

宗教は、日本文化においては正月の初詣、お盆の供養、秋の収穫祭というように生活の中に溶け込んでおり、それらは宗教行事として意識されることはあまりありません。クリスマスという宗教的な祭日すらも、キリスト教徒に限定することなく、多くの日本人は年中行事として祝っています。日本文化は、宗教に限定されない普遍的な愛を、感謝と共に生活の中で表現しているように感じます。

「愛」は、家族のように身近な人間関係を結びつける力です。そして、民族や国家という大きな集まりにおいても人同士を結びつける力となります。さらに精妙な世界では、大自然、生命、存在の原因であるエネルギーそのものと言うこともできます。しかし、このような普遍的な愛の存在は日常ではあまり意識されず、現代において愛は恋愛という限定的な場面のみで認識されている傾向があります。

ヴェーダの意味はサンスクリット語の直訳のみにあるわけではありません。さらに深い意味が隠されているのです。今日、宗教同士の対立が聞かれることもありますが、マントラ プシバムは水と元素の関係における真理を高らかに宣言し、すべての宗教の中にある愛の存在と、宗教の一体性を教えてくれるのです。

現代の社会で宗教の価値を否定する人はいても、愛の価値を否定する人はいないでしょう。すべての宗教は「愛」の力を説き、人と神を結びつける教えと文化をもたらします。マントラ プシバムを唱え、実践することは、宗教の一体性を明らかにして、普遍的な愛の価値を世界に広めることに繋がります。「愛は神、神は愛、愛に生きよ」宗教の本質は愛です。ヴェーダを生きることは、愛に生きることなのです。



唯一の宗教が存在します
それは愛という宗教です
サティヤ サイ ババ

サイと共に

1998年6月28日の会話



学生たちがスワミにプールナチャンドラ・セッションの開催の許可を懇願していた。

(プールナチャンドラ・セッションは、プールナチャンドラ・ホールで行われるセッションのことで、略してPCセッションとも呼ばれている。このセッションでは、学生たちがバガヴァンのそばに座って対話する機会を得ることができる。バガヴァンはその場でさまざまなトピックについて学生たちに話をしてくださる。また、学生や年長者によるスピーチも行われる。このセッションは、コダイカナルやウーティ〔ババが夏を過ごされた高原避暑地〕で学生たちが得たバガヴァンとの交流のようなものである。)

学生たち: Please. (英語のプリーズ) スワミ、please.

スワミ: 「please」の意味は何ですか?

学生たち: スワミ、please〔喜ばせる〕は、幸せにするということです。〔pleaseを動詞として用いる場合〕

スワミ: 「please」は「お願いします」という意味です。〔pleaseを副詞として用いる場合〕

夕 方

スワミ: (学生たちに) どうしてみんなプールナーチャンドラに来なかったのかね? 私は待っていたのですよ。

学生たち: スワミは私たちをお呼びになりませんでした。

スワミ: 私は君たちの寮監に言いました。
(寮監に) なぜ、彼らに言わなかったのですか?
(学生たちに) 今日は何をしたのかね? 待っていた? いいえ、待ってはいませんでした。

学生たち: スワミ、今日はクリケットをしました。

スワミ: クリケットをした?! グラウンドをだめにしたのですか? 今日のお昼は何を食べたのかね? スイーツは何でしたか?

学生たち: スワミ、フルーツサラダでした。

Students With Sai: Conversations 1991 to 2000 p.227より

ベジタリアン クッキング

ココナッツカレー

レッドソースの材料

- ・赤ピーマン 1個 (大) ざく切り
- ・玉ねぎ 1/2個 ざく切り
- ・にんにく 1片 薄切り
- ・生姜 5cm 皮をむいてざく切り
- ・水 1/4カップ

※上記材料を先にミキサーにかけて、なめらかにしておく。

カレーの材料

- ・インゲン豆 100g
- ・人参 1本 ざく切り (100g)
- ・オクラ 1パック (8本)
(オクラのがくの部分を切り落とし、縦に切れ目を入れる)
- ・ジャガイモ 1個 一口サイズに乱切り (100g)
- ・カリフラワー 100g
(切る時は茎の方向に合わせて刃を入れ、小房に切り分ける)
- ・トマト 1個 ざく切り
- ・レモン 1個 半分に切り、種を取る
- ・鷹の爪 (赤唐辛子) 2本
- ・ココナッツミルク 1缶 400ml
(ココナッツミルク粉150g + 水2カップで代用可)
- ・カレー粉 小さじ1
- ・塩 小さじ1

カレーの作り方

1. ステンレス鍋に油をしいて熱し、レッドソースを加え数分間煮る。
2. 鷹の爪 (赤唐辛子)、カレー粉を入れかき混ぜる。塩小匙1を加えて、かき混ぜる。
3. 人参とインゲン豆を加え、さらに煮る。
4. ざく切りにしたトマトを加え、さらに煮る。ココナッツミルクを加え、よく混ぜ合わせ煮る。
5. ジャガイモを加え、数分後にオクラとカリフラワーを加え、中火で野菜を煮込む。
6. ジャガイモが煮えたら、火を止める。
7. 香り付けに、レモン汁を少々振りかける。



ポイント

季節により、春はタケノコ、アスパラ、夏ナス、ズッキーニ、秋はキノコ類、冬はカボチャや大根等入れても美味しいです。

ココナッツ

ココナッツの果肉のココナッツミルクから抽出したココナッツオイルには、豊富な中鎖脂肪酸があり、有効成分ラウリン酸等、体内での消化吸収が早い、中鎖脂肪酸が、肝臓で分解されてケトン体という物質を作り、それが神経細胞のエネルギー源となり、脳を効率的に働かせるエネルギー源となります。中鎖脂肪酸の一部であるラウリン酸は、免疫力を高めます。

参考文献：『脳にいい油、悪い油』（板倉弘重著）

サイババの御言葉

ココナッツの実やココナッツ水、モヤシにした豆類生か少しだけ火を通した野菜や青菜類が健康に良い食物です。(Summer showers in Brindavan 1978. p.195) 『プラサード初版』 p.88より

聖賢はココナッツを非常に神聖な果実だと信じていました。熟してないココナッツもまた神聖です。(Summer showers in Brindavan 1978. p.195)

『プラサード第2版』 p.86より



帰依者スピーチ

Bro. ラージヤシェーカル バダム

プロフィール：

インドのハイデラバード出身。2009年スワミヴィヴェーカーナンダハイスクール卒業。2011年シュリサティヤサイ大学卒業。2016年文部科学省の国費留学生として北陸先端科学技術大学院大学でマテリアルサイエンスの博士号取得。優秀修了者として学長より表彰を受ける。その後豊田工業大学の博士研究員を経て、北陸先端科学技術大学院大学で助教、講師（～2022年）として教鞭をとる。

2022年7月インド企業に電池研究部門ディレクターとして着任。

SSIOJ金沢グループ在籍中は、スタディーサークルを担当。2019年の全国サーダナキャンプや、スタディーサークル部門活動にも大いに貢献。金沢から名古屋センターのナーラーヤナセヴァにも頻繁に参加。

金沢センターの御降誕祭ではバルヴィカスの劇をプロデュースした。



オーム シュリ サイラム

スワミの蓮華の御足に謙虚な祈りを捧げます。

1996年6月30日の「私の親愛なる学生たち (Dear Sai Students !)」第3巻第3章のスワミの神聖な御言葉から私の話を始めたいと思います。

スワミは次のようにおっしゃいます。「この世界ではあるものを受け取るには、別のものをあきらめる必要があります。ハンカチが欲しいときは10ルピーを支払う必要がありますが、そうして初めて店主があなたにハンカチを売ってでしょう」

神はとても親切な商人です。私たちがほんの少しでも献身を捧げるなら、慈悲深い主は無数の恵みを注いでくださるでしょう。貧しい帰依者であるクチェラは一握りの米を主クリシュナに捧げ、彼の祝福を豊かに受けました。ドラウパディー王妃は悲惨な瞬間に、純粋な心で祈りました。過去に彼女が払ったわずかな犠牲のために、主クリシュナは急いで彼女の呼びかけに応え、彼女を守るため彼の無限の恩寵をあふれるほど注ぎました。行動の果実は避けられず、誰もそれらから逃れることはできません。しかし、私たちがふさわしくなり、神の恩寵に値するならば、カルマの結果はある程度無効になったり、修正されたりします。

過去9年間の日本での旅、あるいはSSIOJに参加した日からの旅を振り返ると、私は莫大な恵みを受けました。

インドから日本へ旅立った時、両親や祖父母は私が一人でうまくやっていけるのか、とても心配していました。しかも、最初はJAIST（北陸先端科学技術大学院大学）の松見研究室で、たった3ヶ月間だけのインターンの予定でした。3ヶ月後はどうなっているのか、誰もわかりませんでした。私は不安を抱えて日本に入学しましたが、本当に有り難いことに物事は順調に進み、国家プロジェクトの研究員や国費留学生の採用を経て、博士課程に進むことができました。

国費留学生という資格は非常に競争率が高く、私が採用されるとは想像さえしていませんでした。その後の博士課程に進んでからも、スワミがとてもよく面倒を見てくださったので、私は一瞬たりとも「博士号を取得しなければならない」というプレッシャーを感じることはありませんでした。

博士論文の予備審査を受ける日に、スワミは私に2つの良い知らせをくださいました。1つ目は自分が父親になるということ。2つ目は博士論文の予備審査では、審査員の皆さんから追加実験の要望が一切なく、無事に終わったということでした。自分にとって重要な2つのことが同じ日に起こったことも奇蹟にほかならないと思いました。これは非常にまれな出来事だと思います。そして、最終試験では2つのセッションを行うのですが、1つ目は誰でも参加して聴くことができるオープンセッション形式の試験で、2つ目はもっと厳しいもので、皆が席を外

してから審査員と審査される者だけで議論をする「クローズセッション」というものです。

オープンセッションを無事に終了した私は、他の博士号志望の学生たちと同様に、次のクローズセッションでは審査員たちから何を尋ねられるのかと戦々恐々としていました。なぜなら、クローズセッションでは、審査員があらゆることを質問してくるからです。しかし驚いたことに、いつもは厳しい審査員の先生方が先のオープンセッションの内容に満足していたようで、私は誰からも質問されずにクローズセッションを終えました。これは100万件に1件だと思います。松見先生（北陸先端科学技術大学院大学教授）は、そのようなクローズセッションは「これまで一度も見ることがない」と言いました。

しかしそれもスワミのゲームだったと、私はわかっています。その瞬間、幸せを感じる他には、ただ一つの感情しか私にはありませんでした。それは「私はそんなに多くの恵みに値するのだろうか？」という気持ちです。私は心の内で問い続け、スワミから受けた恵みの100万分の1にも、自分が値しないとわかりました。

私は最終的に優秀修了者賞をいただいて卒業し、スワミは私が卒業する前からポスドク（博士研究員）のポジションを手配されていました。さらに重要なことは、プラシャーンティニラヤムのラジオサイの特別なイベントで話す機会を与えられました。

これは、他のどの賞や博士号よりも嬉しかったです。

私生活の話ですが、インドでのインターンシップ中（インドの国立研究所での職業体験）に、私の結婚がわずか1週間で決まったことをサイの兄弟姉妹の多くが知っていると思います。私は、博士課程在学中に結婚するつもりはありませんでしたが、スワミには別の計画があったのです。

シンドゥー（のちの奥様）の実家に両親に連れられて初めて行った時、私は彼女との縁談にまったく興味を持っていませんでした。その理由の一つは、自分はまだ結婚の準備ができていないと感じていたからです。彼女に会った後、チェンナイ（インターンシップをしていた都市）に戻った私は、彼女の名前さえ覚えていないほど、縁談のことをすっかり忘れて過ごしていました。次の週末、私がパーティに行くと、父から私の決断を聞くための電話がかかってきましたが、私は「決めることができない」と答えました。私の両親は、彼女と彼女の家族を「とても気に入った」と言っていました。

その日の夜遅く、夜行バスでパーティからチェンナイへ移動していた時のことです。スワミが私の夢の中に来られてシンドゥーの写真を私に見せて、「この人と結婚するように」とおっしゃいました。人生において理解のあるパートナーを得ることは極めて重要であり、スワミは私たちをスワミながらの美しいなさり方で、見事に結婚に導いてくださいま

した。このように、スワミは私のために滑らかな舗装された道を歩かせてくださっていると言える、非常に多くの例を挙げることができます。

私たちの人生で最も重要なことは、私たちの環境と私たちが住んでいる地域社会です。スワミは私の人生を常にスワミの帰依者たちの近くにいるように計画してくださいました。パーティにいたのと同様に、スワミの帰依者たちや学生たちがいつも周りにいてくれて、私や私の家族の面倒を我がことのようによく世話してくれました。皆さん一人ひとりと良い経験をたくさんし、同じ時間を過ごすことができたことは、本当に幸運でした。

今日までの日本での日々、皆さんと分かち合った一つひとつの出来事から、自分が大いに祝福されていることを感じます。しかし、ここでいつも疑問に思うのは、「果たして自分は、こうして与えられたすべての愛と祝福に値しているだろうか？」ということです。

ラーマヤナでは、ラーマの御足に触れた石がアハーリヤに変わったと言われています。このような奇蹟が起こったのは帰依者の偉大さだけではなく、御足に触れた神の恵みの力です。スワミはいつも変わらず慈悲深く、私が望んでいない時でさえも、神の恩寵を注いでくださいました。

日本でのこの9年間に、私の人生を非常にいろい

ろな出来事に富んだものにしてくれた神の性質、そのエネルギーに、この私でさえも触れることができたことに感動しています。

スワミが多くを与えてくださるのは、私たちがそれに値するからではなく、私たちをそれに値するほど、相応しくするために、与えてくださっているのだと、強く感じています。それゆえに、これまで頂いてきた恩寵に相応しい自分になれることを願っています。

ジェイサイラム



名古屋ナーラーヤナセヴァ準備の様子



名古屋ナーラーヤナセヴァに参加



サイ大学時代のBro. ラージャ



金沢グループのサイファミリーと共に

ワカ チンナ カタ

アヨーディヤーを
彼に

ラークシャサ（悪鬼/羅刹）の王子であり、大敵ラーヴァナの弟であるヴィビーシャナがラーマの陣営に逃れてきたとき、周りの者たちが反対したにもかかわらず、ラーマはヴィビーシャナを受け入れました。ラーマは言いました。

「私は、私のもとへ避難してきた者はみんな受け入れる、という破ることのできない誓いを立てているのだ」

ラーマはまた、ヴィビーシャナにもう一つの恩恵も授けました。ヴィビーシャナをランカーの皇帝に即位させ、彼の兄のラーヴァナは避けられない戦いにより王座と命の両方を失うであろうと断言したのです。これを聞いて、スグリーヴァ〔猿王〕は驚きを隠すことができませんでした。なぜなら、スグリーヴァはこう言ったからです。

「主よ！ もし明日ラーヴァナがこの陣営に来て降伏し、己れの悪行の許しを請うたとしても、あなたはラーヴァナからランカーとその王座を奪うことができるのですか？」

スグリーヴァが不安そうなのを見て、ラーマは微笑んで答えました。

「私の言葉は必ず成就する。ヴィビーシャナは、何が起ころうともランカーの統治者になるだろう。もしラーヴァナが降伏してきたら、私はラーヴァナをアヨーディヤー〔ラーマの王国の都〕の王に即位させるつもりだ」



『ワカ チンナ カタ』とは「ある小話」という意味のテルグ語で、ババ様が御講話の中で話された、たとえ話や物語です。



<活動報告1>

スタディーサークル

開催日：2021年7月14日(水)

テーマ：プレーマヴァーヒニー 第28節、第29節「善良な行いをし、心を神で満たしなさい」、「神を想いながら、善良な活動に携わりなさい」

参加者：50名

質問：

- ①「手」と「心」とのつながりの意義とは？
- ②セヴァ（奉仕）などの際に一点集中の妨げとなるものは？
- ③「心を滅する」うえで最も重要な側面は？
- ④困難の時、「神の不在」と思われそうな状況をどのように正しく理解するか？

参加者のコメント

「セヴァの段取りを頭の中で組み立てても、トラブルで中断された時に一点集中を妨げられ、パニックになる。その時に自分が慌ててきつい言葉を発してしまうか、落ち着いて『これもスワミ※1の計画だ』と思って落ち着いて対処できるかが試される。」

「私の場合はセヴァなどの時に神様に集中できればよいが、あの人はどう思っているのか、この行動はどう思われているのか、と周りの人に気が向いてしまうことが多く、それは神様への一点集中をととても妨げていると思う。」

「ババが『Die Mind ダイ・マインド』、がダイヤモンドと言われており、つまり心が滅せられることに例えられている。心が滅せられると、真実に基づいた行動できるようになると思う。心自体が悪者ではなく、どのように扱うかが重要だ。もう一つの方法として心を神の愛で満たすことによって、マインドが滅せられて、神の愛に生きるということが結果として心を滅することになるのではないかと感じた。」

「仕事で多くの問題に直面し、自分では何もできないと状況まで行き詰ったとき、スワミが道を開いてくださった。心を乱すような局面で、すべてを神に捧げると道が開く。世界を動かしているのは、スワミだということを最近はずっと体験をしている。やはり、心を滅するためにもスワミにお祈りと全託をするのがとても良いことだと、この二か月、三か月を振り返って思う。」

「目の前が真っ暗になるような一番困ったときは、逆にそれが神の恩寵だったと思うことばかり。一番困っているときに神が不在というよりは、そのおかげで神様の存在がよく分かるということの方が今までの経験では多い。」

「神が不在と思われそうな状況・・・一日に何回かスワミのことを思い出すが、仕事の時はとても集中しているため、また電話や他の人からの問い合わせなどに集中していると、神を持続して思い続けることがなかったと思う。その時のことを後で振り返ると、自分が平静ではなかったかな、あるいは、もっと改善するところがあったかなと思うところが多々あったと思う。神が不在とまではいなくても、思いとしていつも集中できていない。そういう時に自分のハートの中に神はいないのかなと後で反省することはある。」

サイの学生のコメント

「セヴァは他の誰かに対して行うものではないと思っている。決して特定の誰にもセヴァをしているわけではなく、セヴァを促すのは私たちの愛であり、その促しに従わないのは不快だと感じるからだ。つまり間接的に自分自身に奉仕をしている。私たちの内側にある『助けを必要としている人を見た時に生じる不快感』は何だろうか？私たちは別々の存在と考えると、考えてしまいがちだがそこには共通したもの、アートマ（真我）がある。アートマである魂は他者の身体の中にもあり、そして不快に感じる私たちの魂にもそのアートマがある。手と心が繋がっていると感じるのは、私たちの身体でもなく心でもなく魂が繋がっていて、共通した魂が惨めな状態を救おうと促すから。それはすべての中に神様を見るということ。それを理解するならば私たちは間違いなくセヴァに対して一点集中をもつことができると思う。」

「私たちがセヴァをする時、これ見よがしに行っただけではいけない。セヴァは私たちのエゴを強めるようなやり方で行うのではなく、私たちの中に純粋性や神聖さをもたらすようなやり方で行う必要がある。実際に私たちはそのセヴァを私たちのエゴを取り除く手段とする必要がある。またセヴァを捧げた後の他人の評価に重きを置かないこと。なぜなら神はすべてをご覧になっているから。神様はセヴァの内容を

問うのではなく、その動機をご覧になっている。例えばハヌマーン※2は力強く美德のあったお方だった。それにもかかわらず、ほとんどエゴがなかった。ハヌマーンはランカーのラーヴァナ※3に対して自分はラーマ※4の召使であると自己紹介し、ハヌマーンが抱いていた動機はどこからも賞賛を得ることではなく、ただ単に奉仕をすることだった。このようにハヌマーンご自身は世の中にセヴァの在り方を示した。」

「スワミがおっしゃるのは、心は思いの束だということ。そして思いが行動に結びついていく。どんな行動をしてもその背後には思いがあり、その思いの背後には必ず心がある。心には、感覚から正しいインプットを送るようにしていく必要がある。ここで純粋なインプットというのはバジャン（神への讃歌）やナーマスマラナ（神の御名の憶持）とかサットサング（善い仲間に加わること）が大切だと思う。」

「大事なことは、私たちの心に湧いてくる思いに方向性を与えることだと思う。私たちはマインドに湧いてくるすべての思いをコントロールすることができるわけではない。スワミがおっしゃっているように私たちの努力をより霊的なことに捧げることによって、より霊的な思いが湧いてくるようになる。反対に私たちの思いが世俗的なこと、仕事のことで

かりに向いていけば、さらにそのような思いばかりが湧くだろう。」

「私たちは物事が上手く行き舞い上がっているときや、困ったことで困惑しているときに神のことを忘れてしまいがちだ。スワミがおっしゃるのは、大変な困難がやってきたときも、物事が上手くいったときにも、両方とも、それらはスワミからのプラサーダム（供物のお下がり）※5と考えて、両方とも楽しみなさいということ。またスワミは、私たちの現在や未来を決めるのは、現在の行いによるとおっしゃっている。私たちが苦しむときというのは、神様が私たちを苦しめているのではなく、私たちの行いが私たち自身を苦しめている。」

もう一つは、神をグル（霊性の師）とみなす場合。グルや先生はどこかで私たちに試験を課す。もし自分が何か困難に陥っていると考えた時に、一番正しい捉え方は、神様が自分にテストしているのだと思うこと。神様は最も理想的なグルでいらっしゃるのだから、私たちの霊的成長段階を完全に理解していらっしゃる。私たちのレベルに応じて結果的に私たちがクリアできるようなテストだけを与えられる。神様が自分に試験を課していると考えて、最善を尽くしてその試験に合格しようとするのだ。」

「難しい状況に置かれたときに私たちがすべきことは、神様のことをどんなことをしても何を犠牲にしても思い出すということ。たとえ状況がとても悪いものであったとしても、バガヴァン※6は私たちの運命をも変える力をもっていらっしゃる。例えばその状況が起きた時に、バガヴァンが私たちに何かを教えたのだと考えることもできるし、スワミの存在を私たちに思い出させるための出来事かもしれない。どんな難しい状況も、私たちの信仰を神様の方へ向けていくきっかけになっていくと思う。唯一必要なことは神への信仰をもっていること。」

ババ様の御言葉：

『金槌で20回叩いても意思を割ることはできないかもしれませんが、21回目にはわれるかもしれません。これは、最初に20回叩いたことが無意味であったということでしょうか？ いいえ！1回ごとの打撃がそれぞれの役割を果たし、最終的に成功に貢献したのです。最後に現れた結果は21回すべての累積効果です！同様に、あなたの心は、内面でも外面でも、世俗と悪戦苦闘しています。言うまでもありませんが、常にあなたが勝つわけではありません。しかし善良な仕事に没頭し、心を神への愛で満たすことによって、あなたは永続する至福に到達することができます。』

プレーマヴァーヒニー第28節

- ※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ ババ様のこと。
- ※2 ハヌマーン：『ラーマーヤナ』に登場する猿。ラーマを深く信愛し献身をささげた。
- ※3 ラーヴァナ：『ラーマーヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。
- ※4 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。
- ※5 プラサーダム・プラサード（ヒンディ語）：神がなだめられたときに流れ出る恩寵。帰依者が捧げた供物を神が祝福して帰依者に恩寵として与える場合が多い。プラサーダ（サンスクリット）、プラサーダム（テルグ語）
- ※6 バガヴァン：神や半神の呼称、尊者、尊神、至高神 絶対者。

日時：2021年7月18日（日）

テーマ：「永遠なる同伴者の守護を得なさい」

参加人数：47名

Bro. Bが導入スピーチはバガヴァットギターとサイ・ババ様の手紙をもとに、平安とは何か、またいかなる時も御名を唱えることの意義は何かをわかりやすく示しました。

私たちは人生において様々な状況に遭遇します。幸せや喜びを感じることもあれば、悲しみや落胆を感じることもあります。幸せな時には、それを自分の能力のせいにして、さらなる幸せを求める傾向があります。幸せを追求するあまり、私たちは平安や泰然さを失ってしまいます。

バガヴァットギター※1には次のように書かれています。「様々な川の水が大海に入り、四方が満杯になっても大海は邪魔されないように、同じように賢明な人、すなわち絶え間ない欲望が流れ込んでも邪魔されない人だけが平安を得ることができます。欲望を追い求め、その欲望を満たそうと努力する人は平安を得ることができない」と言われています。

このような方向性の中で、私たちは疑問を抱くかもしれません。どうすれば邪魔を受けることなく平安でいられるのでしょうか？安らぎを得るためには

誰に近づけばよいのでしょうか。今日のスタディーサークルでは、スワミ※2 の2つの手紙について考えてみましょう。その中でスワミは、私たちが誰に守護を求めるべきか、どこに神を見出すべきかについて明確な詳細を述べていらっしゃいます。平安なのは、現在の地位に満足している人たちです。

この変化に富んだ世界で、私たちは楽しいことも嫌なことも含めて様々な人生の波乱に遭遇します。私たちは心と身体の両方の病気に悩まされています。身体は病に冒され、心は心配事で満たされています。このような不幸、混乱、惨めな状態の中で、唯一の方法は、サイに守護を求めることです。サイだけがこれらの困難や病気を取り除き、私たちに健康、平安、繁栄をもたらすことができます。

サイの御名を口にしている人は、ジーヴァンムクタ（生きながら解脱している人）です。なぜなら、サイを継続的に思い出すことで、エゴの感覚を排除し、不滅で変化のない自己を実現することができるからです。御名は、帰依者とサイの間の絆です。それは、帰依者をサイと対面させ、サイとの一体性の知識を得ることを可能にします。

この2通の手紙の中で、スワミは帰依者たちに自分の守護を得るように指示しています。人生の混乱をわたらせることができるのは神だけだからです。

神はいつも私たちと共にあります。真の幸福は、神との一体性によってもたらされます。私たちは皆、サイの守護のもとにあり、目的意識をもって至福の人生を送りましょう。

質問：

- ① 私たちの平安を妨げるような状況をどのように克服したことがあるか、どのように克服したいと思うか？
- ② 神への信仰が試される場面において、どのように神への信仰、つながりを再確認したか？
- ③ 「純粋さがあるところに神がいる」に関して、もつべき純粋さとは？

参加者のコメント：

「スワミの学生さんたちが初めて夏季インターンシップで来日された時、プログラム中のQ&Aで何か悩んでいることはないかと質問があった。その際、会社の人間関係に悩んでいて辛辣なことをいつも言う方がいると話した。その時に『その人はきっとカルマ（因果応報の結果）を解消してくれていると思いますよ』というアドバイスをいただいた。その後、その辛辣なことを言う人は会社を辞めて、すごく状況が変わった。相手はカルマをきっと取ってくれたと思えるようになった。」

「平安が乱れて怒りに苛まれて心が乱れたときに、バジャンを聞く気にもなれないしナーマスマラナ（唱名）をしようとしてもすぐに口が止まってしまってどうしようもなかった。そのような時に偶然ババの『ゴールデンヴォイス（サイ・ババ様の歌唱が収録されたバジャンCD）』のバジャンを聞くことになり、一瞬ババの声を聞いたときに心がスワミの方に向かって怒りから離れられたのが嬉しかった。」

「サイセンターで、人生の中でこんなに難しい人と出会うことはないと思う方が一人いた。人からはうまく対応しているように見えても、私なりに毎日のように悩んで苦しんでいた。自分の至らなさを修正するためということは理解していたが、自分が何をすべきなのか、何を直すべきなのかとずっとスワミに問いかける毎日だった。ある時に、同じ苦しみを他の人からされたらとても耐えられないが、その方からこういう苦しみを与えられたなら耐えられると思った。もう既にその方のことを愛していたとは思ふ。そして、その方と一生付き添ってやっていく覚悟を決め、自分で決意したことをスワミに祈り、どうかその方を愛せますようにと本当に祈った。その方に向けて光明瞑想をするなどいろいろしたところ、結果的にはその方がセンターから離れてしまった。私とその方の間には何も悪い感情は残らず自然と離

れることができた。そういう苦しい状況の時には本当に光明瞑想をその方にも自分にもして、本当にスワミに祈ることがとても良かったと思う。」

「Sis. Sのお話で、サイ大学に入ることをスワミが意志されているかどうかをスワミに聞いたところが本当に純粹だと思った。スワミがどう思うか、神がどう思うかと考える信仰心というものもつべき純粹さだと思う。自分は後で一番は神。神のご意志がすべてという在り方が本当の純粹さだと思う。」

「純粹というのは、エゴがない状態だと思う。もし私の中に美しいものや純粹なものがあれば、私も持っている最高で純粹なものは、神様どうぞあなたがお持ちくださいと思ってしまう。自分の中の美しいものがあれば、その最上のものはどうか神様、あなたに捧げますという思いをもつのが良いと思う。」

サイの学生のコメント：

「自分が自信に欠けるかどうかは、自分の心の中で『もし自分が失敗したり何かを間違えたりしたら、他の人がどう思うだろうか?』と考えることが原因ではないかと思う。たとえ他の人がどのように考えても自分を変えられるわけではない。それよりも一番大事なことは『スワミがどうお考えになるだろうか?』ということ。スワミだけが今の状態とすべてのことを一番よくご存じであり、他の人たちは実際に行われている行動だけを見て判断して、実際にはその意図を考えない。人生においては、スワミだけが最も大事で他の誰でもない。スワミの個人的な人生の中で、スワミを批判する人がいたり、何かスワミに関して間違ったことを広める人がいたり、スワミはマジシャンだとか言う人がいても、まったくそれに対して心配することはなかった。スワミがそのような問題に直面しないのは無条件の愛をもっていらっしゃるから。たとえ人々がスワミのことを愛していなくても、そういう人をスワミは愛していらっしゃる。そういった意味で愛が心配の薬だと思う。私たちはスワミがどういう人であったかをもっとよく読んで学んでいく必要がある。」

「自分の場合、最初に計画した通りに物事がいかないと心配になる。期待した通りの結果が得られないと私たちは心の平安を失う。しかし私はスワミの

大学に入った後で自分の考えが変わった。すべての心配がなくなって完全な平安になったわけではない。でも多くの光を当てて、それを変えることができるようになってきた。もう一つ大事なことは、私たちが自分でコントロールできないことに関しては、受容して受け入れるということ。例えば、私たちがどれだけ最善の努力を払ったとしてもいつも最善の結果が出るわけではない。私たちはそれを受け入れるという姿勢をもつことが大事。そして神様だけが私たちにとって何が最善であるかを分かっている。もし何か計画した通りに行かなくても、最善のことが起こっていると考えれば良い。こういった姿勢が自分の心配の多くの部分を克服することを助けてくれる。まさにそういった姿勢により神のご計画を受け入れることができる。」

「多くの人の人生でいろいろな状況がやってきて、なぜこれは自分にやって来るのだろうと思うことがあると思う。『どうしてスワミ、これが自分の身に起こるのでしょうか?自分は正しい道を歩んでいないのでしょうか?』と思ったこともある。最近、シュリ・サティヤ・サイ・ハイヤー・セコンダリー・スクール（サイの高校）の先生のお話を聴いた。そこで先生が一つの素晴らしい体験を教えてくださいました。プラシャーンティ・ニラヤム（プッタパルティ※3にあるサイ ババの住まいとアシュラムの総称）に年配の帰依者の方がいて、アシュラムのセキュリ

ティーの担当の方だった。その方は本当に自分の人生の始まりから、ずっとスワミと共にいらっしやっ、自分の人生のすべてをスワミに捧げてこられたような方。でもその方の人生は肉体的には多くの苦痛を経る人生になっていた。そんな時に彼のことをスワミが時々様子を見に来てくださり、ある時にその年配の帰依者がスワミに聞いた。『スワミ！私は自分の人生のすべてをあなたに捧げています。私は結婚してもいないし、あるいは自分の家族を何年も訪れていません。私は自分の人生をそのように全部スワミに捧げているのに、どうして私はこれだけの苦しみを負っているのでしょうか？あなたは神でいらっしやるのですから、私のこのような苦痛を取り除くことができになるのではありませんか？それともあなたは神ではないのですか？』そのお話をすべて聞いてスワミは微笑まれて、肩を叩いておっしゃった。『あなたが私の帰依者であるというだけでは、あなたのカルマを取り除くことはできません。あなたはカルマの重みには耐えなければならないのです。でもあなたが自分の人生を私に捧げているので、あなたが困難に直面していてサイ・クルワント・ホール（ダルシャン・ホール）にダルシャン（聖者や紙を拝見すること）に来られない時にも、私があるのところにきてダルシャンを受けているのです』。そしてスワミはその方にヴィブーティ（聖灰）を差し上げて出てこられた。スワミがその帰依者にそのようにしてくださった時に、その先生

も居合わせたとのこと。それでスワミがその帰依者におっしゃったのは、彼はスワミのことを本当に友人のように扱っていて、痛みをもスワミに任せていた。人が何らかの疑問を抱く時には、神が帰依者をテストすることがある。そんな疑問が来た時には、神に祈って信仰を再度確かめる必要がある。そのように帰依者がするのであれば、たとえ帰依者がスワミのもとを去ったとしても、スワミはその帰依者のもとを去らないとおっしゃっている。たとえ私たちが疑念を抱いたりすることがあったとしても、私たちはそれをテストと受け止めて信仰をもっていく必要がある。『テストがあったとしても結局私たちはスワミの方向を向くことしかできないのです』という態度でいるのであれば、スワミが面倒をみてくださる。昔、自分が信仰について疑念を抱いた時に、このエピソードを与えられ、このエピソードがスワミからの答えだと思った。私たちが何か疑いをもった時には、その疑いでさえも神に捧げれば本当にすべてのことに対してスワミが面倒をみてくださり、その答えを与えてくれると思う。」

「パールヴィカス（子供の開花教室）の子供の頃、多くの神様の物語や栄光についてたくさん話を聞いた。多くの物語やYouTubeの動画などを観る中で、時にはスワミが本当のグル（霊性の師）ではないと主張している動画などを観た時に、パールヴィカスで学んだことに疑念を持ったが、ある日サナータ

ナ・サーラティ誌（シュリ・サティヤ・サイ出版協会の月刊誌）に書かれていた御講話にあったのは、『メディアではスワミに反対する人々や、スワミが本当のグルではないと言っている人々が出ていても、私はまったくそんなこと気にかけていない』という内容だった。そしてスワミの唯一の動機、意図は、私たちを変容させて世の中をより良いものにするのみ。そのサナータナ・サーラティ誌を通して、スワミがそれに答えてくださったと感じて、再びスワミが自分のグルだということを確認するようになった。またサイ大学に加わる前、スワミに自分は果たしてサイ大学の入学試験を受けるべきなのかどうかを聞きたいと思っていた。それでスワミの祭壇にお花を2つ捧げ、そして『祭壇に置いた2つのお花の片方だけでも祭壇から落ちて来たなら、私はスワミの大学に入るべきだと考えます』と祈った。そして一日二日経ったら、お花の一つが祭壇のスワミの写真から落ちてきた。そのお花が落ちて来たことに関して自分はすごく嬉しかったが、『誰かが扇風機のスイッチを入れたのかな？バルコニーから風が吹いて来たのかな？』とも考えた。でも、落ちて来たお花をもう一回飾り直すと今度は花はもう落ちて来なかった。本当にご意志があってお花は落ちてきたと確信した。私がスワミに話しかけていることは、すべてスワミは聞いていらっしやると再び確信するに至った。サイ大学に実際に入学した後も、やはりスワミは自分の祈りを確実に聞いていらっしやると

確信することになった。当時そういうことをしたのは無邪気なことであったと思うが、そういったことも私のスワミへの信仰を確実なものにしてくださった。」

「純粋性とは、否定的な思い、エゴ、他者に対する憎悪がないということだと思う。もし私たちが他者を受容することができれば、他の人を悪く扱うとか、他の人と比べることにはならないだろうと思う。そのような純粋性をもてば、私たちが意図するすべてのことは悪い意図ではなく良い意図だけになっていく。人生において、両親が何をしているかということの子供はあまり理解していないが両親は今子供に何を与えるべきかをよく分かっている。同じようなことを人間と神に関しても考えることができる。私たちが正しい道を歩もうとも、間違った道を歩もうとも、神様は同情心をもって正しい道に戻るよう促してくださる。以前のスタディーサークルで私たちが学習した内容で、私たちは神様が糸を握っている凧のようなものだという話があった。どのように凧が飛んでいても、神様はその糸を握っていてくださっている。神という概念はとても複雑なもので理解するのはとても難しいので、私たちは周りにいる人を理解しようとしたり、良く扱っていかうしたり、良い意図をもとうとすることが、神をも理解しようとする事へのステップになっていると思う。

まず私自身を理解し、そして自分自身を良い人格にしていかなければならない。そのことが次のステップとして身の回りの人たちを正しく扱うことにつながると思う。そのことがちゃんと達成されたのであれば、私と他者、そして神との違いがなくなっていると思う。他者を受け入れて正しく扱うという二番目のステップが終わるときには、純粋性というものが達成されている時だと思う。思いと言葉と行動の一致という純粋性が達成されたときには、すべての人が神であると思う。私たちがそのような達成を目指していかなければならない」

ババ様の御言葉：

『心を善良で純粋な思いで満たすなら、人は純粋になり、純粋な人生を送ります。道徳は善良な行為を土台としています。神聖で、純粋で、役に立つ活動は、正しい行為に相当します。そのような振舞いこそが、人間の卓越性の開花をもたらすのです。』

1987年8月16日

- ※1 バガヴァッドギーター：インドの大叙事詩『マハーバーラタ』の中の一詩。マハーバーラタの戦いの前にマーヤーによって戦う意気を失ったアルジュナにクリシュナが説いた御教え。
- ※2 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
- ※3 プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。

2021年7月21日（水）

テーマ：プレーマヴァーヒニー 第59節「神に到達するために内外の迷妄から解放されなさい」

参加者：55名

質問：

- ① 自己探求によってどのように私たちの「霊性修行者としての特質」と「普通の人の特質」を区別するか？
- ② この節でスワミ※1が語られた特質を得るためにはどのような実践が必要か？
- ③ 内的な幻影と外的な幻影についてどう理解するか？

参加者のコメント：

「外界のものは魅力的だが、ちょっとしたことで心が捉われてしまう。そこで外側のものに引っ張られている時は、一歩立ち止まって『私はそういうものに捉われる人間ではない』と思り返す。そのように神に向かって行くのが霊性修行者ではないかと思う。」

「私はサイを信じるまでは外側の皮を分厚くしていたようで、平等心とか万物への等しい愛というのは夢のまた夢という方向に行っていたのではないか

と思う。霊性修行を始めて外側の皮を剥いているのかは分からないが・・・」

「外側に見えるものは幻影。それは一時的なもの。絶えずそれは永遠のものなのか、あるいは一時的なものかを見分ける識別力を持って実践していくことが必要。」

「どんなに小さなことでも霊性修行には忍耐が伴うと思う。例えばこの世的に楽しいと思うことをやめてバジャン（信愛の歌）会に参加したり、ヴェーダ（神聖な真理の言葉）※2を勉強するなど、そう一つひとつのことのすべてに忍耐力が必要なのではないかと思う。忍耐をもって続けていくとそれらの素晴らしい価値に気づく。それが霊性修行ということではないかと思う。」

「とても難しいが、目に見えるものと目に見えないものと考えれば分かりやすいと思った。目に見えるものが外的な幻影で、目に見えないものが内的な幻影だとすると、世の中で起こることに捉われるのは外的な幻影。内的な幻影とは悪いもので例えば、怒りや執着などの心の動きかと思う。」

「僕も最初、霊性修行者は内的な幻影に夢中であるというのを読んで、神は内側にも外側にも捉われないというのを読み『え!』と思った。光明瞑想では

『私は光の中にいます』と言って、そのあとに『光は私の中にあります』、と言う。そのあとに『私は光です』という状態に到達する。私自身という存在自身が肉体意識を手放していくと光そのもの。愛そのものに行きついた時には内側と外側というものがなくなっていくのかなと思った。スワミは常に私たちに愛を与えてくださっている。会社で仕事をしているとどうしても収入を基準に考えてしまうが、やはり日々の生活を神聖なものにしていくために、常に与えるということ意識して実践することがやはり大事だと思う。」

サイの学生のコメント：

「プッタパルティ※3の先生が『いろいろなエゴがあるけれども、一番危険なエゴとは霊的なエゴ』だと教えてくれた。多くの霊的な書物を読み、霊的な知識を得ると、それによって私たちが優れていると思込んでしまいがちだ。霊的であるということの本当の定義は“霊的な求道者がエゴをもっていない”ということであるはずだと思う。学生の頃、サイ大学の教授方々が多くの大事なことを教えてくださった。『ただサイの学生だとかサイの帰依者だということだけでは、サイを知らない外の世界の人々と比べて皆さんが善いということをもっと意味しない』ということ。外の世界にも沢山の素晴らしい人々がいて、スワミを知らなくても、正しい行いを

実践している人々がいらっしゃるということだった。」

「霊的な求道者も普通の人も一つだけ共通していることがあると思う。それはどちらも幸せを求めている。でも何に幸せを感じるかということが違っている。普通の人は何か欲望が満たされた時に幸せを感じる。その一方で霊的な求道者は必ずしも外的な体験ではなくて内的なる喜びから幸せを引き出そうとする。そして幸福を追求する中で、霊的な求道者は“真実なる存在”を求めている。霊的な求道者とはその答えを自己探求によって見出そうとする人だと思う。その違いを私たちが体験していかなければならないと思う。実際に体験するためには、一体何が永遠のもので何が一時的なものなのかを識別することによってその違いを体験できると思う。霊的な求道者は世俗的な楽しみに埋没することがない。何故ならそういった楽しみは一時的なものであると知っているから。そして自己探求が大事になるが、その中で言葉をコントロールが大事な部分だと思う。言葉をコントロールすることに気をつけておけば、旅の初めの段階では大丈夫ではないかと思う。心は思いの束であり、いろいろな思いが束になっていて、そこに光が通ったときにプリズムのように色が変わっていくようなもの。とてもコントロールされた心が霊的求道者の特徴だと思う。」

「平安、慈善、すべての人に奉仕するなどの特質が考えられると思う。実際にどのようにそれらを実践

「平安、慈善、すべての人に奉仕するなどの特質が考えられると思う。実際にどのようにそれらを実践するか否かは、一人ひとりの決意によるものだと思う。さらに、もう一つ実践できる大事なことは、帰依者たちの仲間の中に居ることだと思う。霊的な仲間の中にいるということ自体が、私たちの中に霊的な実践への決意をもたらしてくれる。例えば自分の過去の経験に、バジヤンにとっても疲れていた時期があった。そんなとき仲間が頑張ってバジヤンを歌っていた状況に支えられ、続ける決意させてくれた。それがバルティでの学生時代に学んだことの一つ。帰依者の仲間の内にいるということが実践に対して必ずポジティブな影響を与えてくれると思う。セヴァや他のいろいろな活動に関してもそういった例を挙げることができると思う。」

「私たちがもっている悪い性質は心と関係している。心が逸らされるのには、3つのタイプの場合があるとスワミがおっしゃっている。1つはマラと呼ばれる不純物によるもので、これを理解するためにスワミが心を鏡に例えて説明してくださった。鏡の表面に沢山のほこりが付いていると、どれ程自分の顔を綺麗に洗っても鏡に映る自分の顔は綺麗には見えない。そのように自分たちの心に付いている不純物がマラと呼ばれるもの。このような不純物は過去世から持ち越していることもある。マラを取り去るため

には、すべての行為に神を黙想しながら行うことが必要である。また摂取する食べ物の種類によっても心に多くのマラを生み出す。二つ目のタイプがヴィクシェーパと呼ばれる不純物。例えば鏡が動き回っていたら、はっきりとその像を見ることが出来ない。そのように動き回る鏡のように揺らいでいる心がヴィクシェーパと呼ばれるもの。その揺るがない心の着実さを得ることが、霊的な規律のために非常に大事になってくる。そのような着実さを得るために最も良いのは九つの帰依の道の実践である。三つ目のものはアーヴァラナと呼ばれるもの。例えば鏡が布で覆われていると考えてみる。このアーヴァラナという布を取り去るためには、その前のヴィクシェーパを取り除かなければならない。着実さを得てヴィクシェーパを取り除いた後で、動き回る鏡が止まってから初めて、その掛かっている布を取り除くことができる、すなわちアーヴァラナを取り除くことができる。スワミはどんな霊的求道者も、この三つの心の歪みを取り除くように努力する必要があるとおっしゃっている。これらの三つを取り除くことができれば、他の良い性質の殆どを習得することができるということだ。」

「このことを理解するために、ウパニシャッド（ヴェーダ聖典群の中の哲学的部門の総称）の中に出てくる理論がある。ウパニシャッドの中には4つのマハギャッタという部分がある。非常にたくさんの

マハギャッタがあるが、中でもこれらの4つが特に大事だといわれている部分がある。一つ目に出てくるのは、“あなたはブラフマン(絶対実在)の一部である”というもの。いつも世俗的な事柄に携わっているひとはブラフマグニャーナ（神の知識）を理解していない人ということになる。そして普通の人とは、私たちの内にブラフマンがあるということに気付いていない人。少なくとも帰依者が、世俗的なことがすべてではないという段階にたどり着いたなら、ブラフマグニャーナ（神の知識）や次のステージにたどり着いたことになる。内側がブラフマンになってくることが霊的求道者になるということだとスワミがおっしゃっている。2つ目のマハギャッタが“私がアートマ(神我)である”という部分になる。自己がブラフマンであるという段階。霊的求道者はアートマとは何かということについて考えなければならず、その中で自分がブラフマン、自分がアートマだということを見つけていく。3つ目は“あなたはそれである”という段階。次に、あなたは神である、“アハムブラフマースミ”というのが4つ目の段階で“私は神である”という段階。それが人がたどり着く最終的な段階である。」

ババ様の御言葉：

『外界の幻影に惑わされない人は靈性修行者となります。そして、内面の幻影もなくなった暁には、神と呼ばれることがあります。このような人物のハートこそが、神の座となるのです。それゆえ、すべての中に神が浸透していると推論することは可能です。もちろん、すべての人のハートの中に神はいるのですが、それを自分自身で見出すためには、靈性修行が必要なのです。』

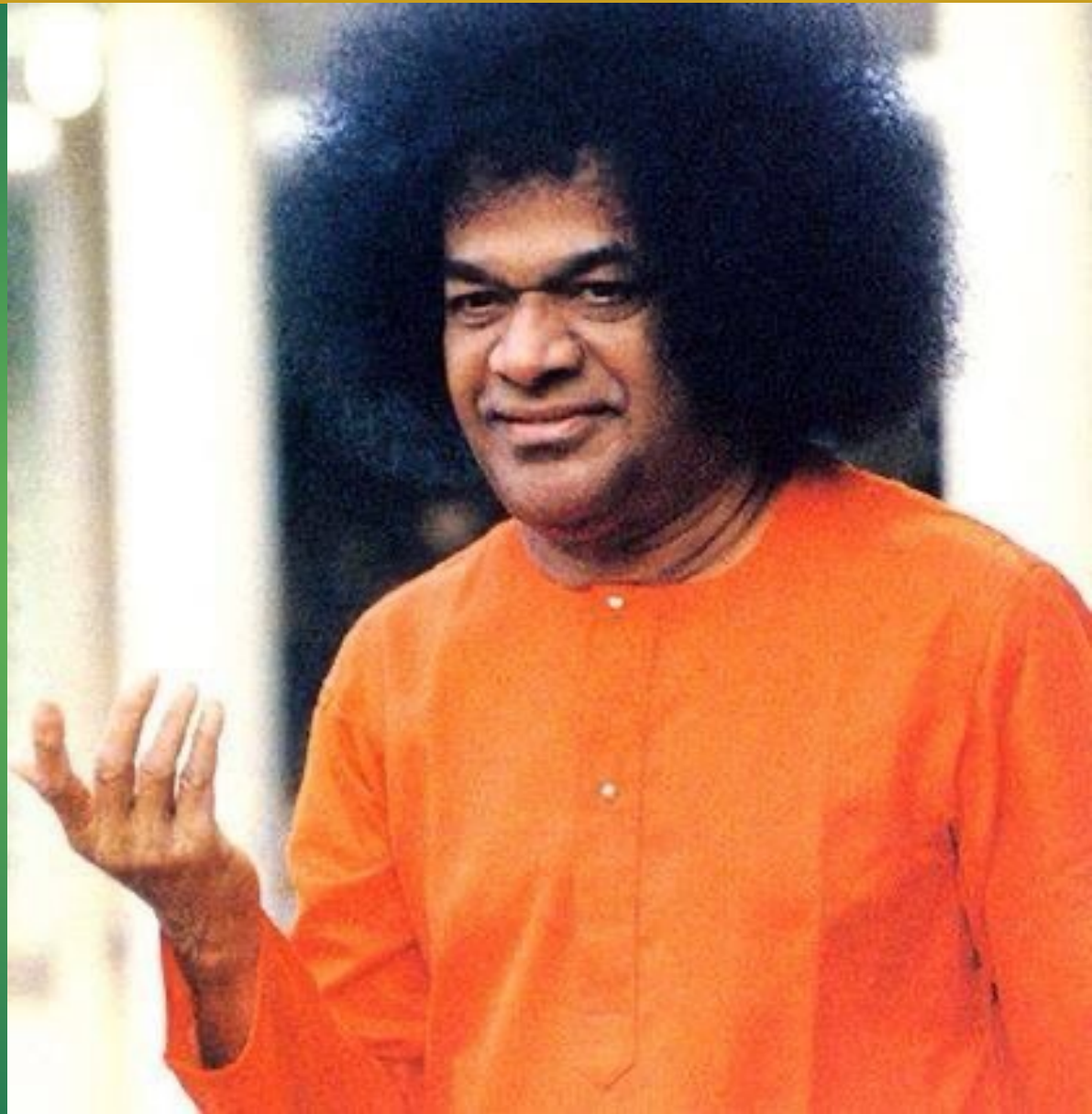
プレーマヴァーヒニー第59節

※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※2 ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。

もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグヴェーダ、アタルヴァ ヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。

※3 プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。





<活動報告 2>

東京センター 「グル・プールのニマール祭」報告

オーム シュリ サイ ラム

スワミの蓮華の御足に感謝のお祈りを捧げます。

2022年7月13日、東京センターにてグル・プールのニマール祭が開催されました。新型コロナウイルス感染症対策として、会場での参加人数制限のもと、会場参加とオンライン配信の組み合わせでの開催でした。会場では、サンジェイ・クマール・ヴァルマ駐日インド大使ご夫妻も臨席されました。

東京センターの祭壇は、特別なお祭りのために、約2メートルほどの、ババ様の立ち姿の大きな写真にガーランド（花輪）がかけられ、玉座の花もとて

もきれいに飾り付けられました。

プログラムは、ヴェーダの吟唱から始まり、続いてバジャン（信愛の歌）が捧げられました。コロナ禍で、少人数であっても会場で一体となって捧げる機会が大きく減ったため、東京センターでは約1か月ぶりのヴェーダ、バジャンでした。バジャンは、「Shri Ganesha ShriGanesha/Baba Avo Mere Kirtan me/広い広いこの空は/Guru Deva Sharanam Deva/グルサイ光の中に/ジャヤジャヤサイハレ/Vahe Guru Vahe Guru」と、グル・バジャンを中心に捧げられ、会場は一体感に包まれました。

続いて、Bro. Aより、ババ様のご生誕100周年に向けて、つま恋彩の郷で予定されている、日本最大の霊性探求施設の建設計画について、報告が行われました。計画書と建設模型を玉座に捧げられたのち、スライドを用いて計画案を共有いただきました。つま恋の地に、約5000坪の敷地を用いて、大きな霊性施設が建設される予定です。ババ様の御言葉が中心に据えられ、空間全体をつかって包み込むようなコンセプトのデザインで内装が設計されています。この施設は、SSIOJ（シュリサティヤサイオーガニゼーションジャパン）の会員、真理を探究する人だけでなく、日本において、漠然とした不安や孤独感に苛まれている方、

生き方に悩む方にとっても、スワミの御言葉によって何らかの助けを得られる場になることを目的とされています。

続いて、ババ様の御講話の動画が流されました。

「他人のために、わたしたちはハローと呼びかけるかもしれませんが、ハートはホロー（空っぽ）です。こういった妙技は自分を欺くものであり、よくありません。皆さんは、愛を実践し、神聖な感情を育て、自分のハートに従うべきです。」

という、ユーモアを交えた御講話の内容で、会場はあたたかい笑いに包まれる場面もありました。

その後、前週の金曜日に、銃撃によって逝去された安倍元首相と、インドとのつながりの深さについてのご紹介と、追悼が行われました。ガンジス川のヴァーラーナシーにて、安倍元首相とインドのモディ首相が、ともにアルティを捧げられたときの動画が紹介されました。そしてプログラムは、アルティ（献火）にて終了となりました。

このような吉祥な日に、皆さまと、グル（霊性の師）であるスワミ※1への感謝の祈りを捧げられましたことを、心より感謝申し上げます。



サハ ナーヴァヴァトウ
(私たちが共に守られますように)

サハ ナウ ブナクトウ
(私たちが共に育まれますように)

サハ ヴィールヤム カラヴァーヴァハイ
(共に精力的に働きますように)

テーチャスヴィナーヴァディータマストウ
(私たちが学んだことにより光輝を得ますように)

マー ヴィッドヴィシャーヴァハイ
(互いを憎むことはありませんように)

ジェイ サイ ラム
東京サイセンター

※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイババ様のこと。





Sri Sathya Sai Bhajans Japan

神さまの御名を唱え
熱烈な愛と切なる想いを抱き
蓮華の御足を崇め歌う

その願いに寄り添えることをババ様にお祈りし
バジヤン練習用音源を準備制作しています。
男性音域キー・女性音域キーを各3種類用意。

当面は
『SRI SATHYA SAI RAM NEWS』
と
YouTubeにて配信していきます。

称えようガナナータ

SSSIOJ BHAJANS
男性練習キー-M±0
称えようガナナータ

00:00 / 03:30

- 1 男性練習キー-M±0
- 2 男性練習キー-M-1
- 3 男性練習キー-M+1
- 4 女性練習キー-M±0
- 5 女性練習キー-W+1
- 6 女性練習キー-W-1

ガネーシャ崇めよ




SSSIOJ BHAJANS
男性練習キー-M±0
ガネーシャ崇めよ

- 1 男性練習キー-M±0
- 2 男性練習キー-M+1
- 3 男性練習キー-M-1
- 4 女性練習キー-W±0
- 5 女性練習キー-W+1
- 6 女性練習キー-W-1

神様 神様




SSSIOJ BHAJANS
男性練習キー-M±0
神様 神様

00:00 / 04:43

- 1 男性練習キー-M±0 ダウンロード
- 2 男性練習キー-M+1 ダウンロード
- 3 男性練習キー-M-1 ダウンロード
- 4 女性練習キー-W±0 ダウンロード
- 5 女性練習キー-W+1 ダウンロード
- 6 女性練習キー-W-1 ダウンロード

9月号掲載楽曲

- ① 『称えようガナナータ』
- ② 『ガネーシャ崇めよ』
- ③ 『神様 神様』

Love All, Serve All



Help Ever, Hurt Never

シュリ サティヤ サイ インターナショナル オーガニゼーション ジャパン

ssoj@sathyasai.or.jp

FAX 03-4330-1399